
剣聖將軍記

やま次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣聖將軍記

【Nコード】

N4359Y

【作者名】

やま次郎

【あらすじ】

室町幕府第十三代將軍・足利義輝

彼ほど幕府の復活に力を尽くした人物はいなかったと思う。八代義政以降、彼前後の將軍はどれも見ても傀儡將軍でしかなく、自身の力で將軍親政を目指していたのは彼だけだったのではないか。儂くも時の天下人の間で藻掻き続けるも命を散らすことになるが、彼の周りには後に天下に名を轟かす名将たちがいた。「天下を治むべき器用有」とも称された義輝がもし自らの力（領地&兵）を手にした

らぶらぶなるか？

それを話にしてみようと思っ

第一幕 天下争乱 - 將軍弒逆 -

劍聖將軍記

序章 〱 異見・永禄の変〱

永禄八年（1565）五月十九日、洛中にて変事が起こった。

足利幕府十三代將軍・足利義輝の住まう居館が突如、軍勢に襲われたのである。

御所を囲む軍勢は、旗印から京畿一帯を領する三好家の手によるものだと判別できた。

また三好家中でもその名を轟かせている松永氏の軍勢もあつた。

御所を襲撃している兵は一千足らずだが、三好勢は將軍を逃がさぬよう洛中全体に兵を配備しており、その数千を数えた。対する義輝側は百から二百余り。それも女子供を合わせた数である。僅かながら洛中にいた幕臣らが駆けつけてはいたものの焼け石に水であり、御所の囲みを突破して義輝の下へ辿り着ける者などは誰一人もいなかった。まさに多勢に無勢。義輝の死は絶対であつた。

ただ義輝も座して死を待つ気はなかつた。

足利義輝、御年三十。

幕府の、武家の長として衰退の一途を辿る將軍家に歯止めをかけ、復権を目指す最中で己を高めることを忘れなかつた。その甲斐もあり、故事、礼式に精通、武家の長として恥ずかしくないよう劍術を始めとした武術を悉く修めた。南蛮渡来の鉄砲もなかなかの腕前だ。

「ええい、將軍はまだ討ち取れんのか！」

義重が辺りに喚き散らす。戦いが始まってより半刻（一時間）余り、小勢の將軍を大軍かつ奇襲したのにしては時間がかかっていた。

「少しは落ち着かれよ、左京殿」

「されど日向守。義久（のちの松永久通）めの為体（ていたらく）は目に余る。こちらからも援兵を出すべきではないのか？」

日向守と呼ばれた三好日向守長逸はゆつくりと首を横に振った。

そして若い義重を諭すように話し始める

「よいですか。此度のことは理由はどうあれ將軍を殺すのです。天下に悪名を轟かすことになりましょう。なればこそ、義重殿がその悪名を背負うことがあつてはなりません」

つまり長逸は自らは兵を繰り出さず、將軍暗殺を松永一手に行わせようというのだ。そうすることにより將軍殺しの汚名は松永が着ることになり、三好家は潔白とまではいかぬとも下手人ではなくなる。それなら後々に新將軍を擁立した後に政敵・久秀を追い落とすことも可能と踏んだのだ。だからこそ共謀したふりをして將軍暗殺に手を貸していたのだ。

長逸は冷静にこの戦いの意味を話していたが、内心は少し焦っていた。それは將軍方の予想外の反撃が理由だった。

（このままでは松永勢は全滅するやもしれぬ。そうなれば嫌でも我らの軍勢を繰り出さねばならん）

四方の門から雪崩れ込んだ松永勢であったが、小笠原民部少輔、一

色淡路守ら幕府奉公衆の反撃に為す術もなく討たれていた。何故なら、主たる義輝も武術に秀でていたが、その稽古に付き合っていた奉公衆らも揃って武術に秀でた者たちだったからである。一人で二人や三人を相手にするなど奉公衆らにとっては造作もなく、一人で十人を斬った者すらいた。だがその奉公衆も圧倒的な数の前に力尽き、次第に数を減らしていく。

この続報に長逸は胸を撫で下ろした。どうやら計画通りに事は運ぶと。だが、そんな思惑は次に飛び込んできた報せですぐに吹き飛んでしまった。

「も、申し上げます！将軍方と思われる一団に御所への侵入を許しました！」

「何じゃと!？」

長逸は耳を疑った。洛中には数千にも及ぶ自軍が展開している。御所を囲んでいるのは松永勢だけとはいえ、囲みを突破できるだけの人数が発見されず近づけるわけがない。

「敵の数は分かるか!？」

「そ…それが…：…僅か10人足らずでして……」

「うつけが!その程度で狼狽えるな!」

長逸が床几から立ち上がり、使番の肩を思いつき蹴り飛ばす。その後ろで義重は「義久めがここまで戦下手とは知らなんだ」と呟きながら「日向守も落ち着かれない」と先ほどとは反対の立場で言葉をかけた。

「ふん!」

等から頭部を守ることなど出来ない。ましてや義輝の持っているのは数ある刀の中でも名刀と呼ばれる逸品である。陣笠は綺麗に二つに割れ、頭部からは鮮血が飛び散った。

返り血を浴びた義輝の姿はまるで仁王の如く、周囲を凍り付かせた。義輝は隣の足軽を横一線に斬りつけて蹴り倒し、刀身を胸部に突き立てた。さらに睨まれた足軽は持っていた手槍を力なく繰り出す、それは軽々と躲され、脇差しで脇腹を刺された。

「ふ……、たわいもない」

屋内であることから義輝を一度に襲える人数は限られている。多対一になったところで一人で百人と戦うわけではない。かといって槍や刀で義輝相手に満足に戦えるものなど現れず、震えた手で弾く弓など躲すのは造作でもなかった。

突然に虚無感が、義輝を襲う。

存分に暴れて斬り死にしようと思込んでいたものの、実際に戦ってみれば力の差は歴然としていた。戦っても戦っても一方的に相手を斬るだけ。しかもここから見える敵の半数近くは戦意を失いかけている。

（これを斬ったところで、余の心は晴れまい）

ここらが潮時、やはり自害して果てるか。そう思った瞬間だった。遠くから大きな足音が近づいてくる。明らかに集団だ。敵の増援かとも思ったが、どうやら違うらしい。松永兵の様子がおかしい。

途端、いくつもの呻き声上がり、足軽たちが倒れる。逃げる者を

多数いた。

「ご無事か！公方様！！」

「な…勢州！？」

驚いたことに現れたのは義輝の師・上泉伊勢守信綱その人であった。

「おやおや、こりゃ随分と暴れたようじゃな」

「ト伝殿もか！」

「息災かな、大樹公」

続いて現れたのは塚原ト伝（つかはらぼくでん）。これもまた義輝の剣の師である。流石というべきか、この状況においても周囲を眺め、軽口を叩く余裕がある。

「どうしてここへ？」

「話は後じゃ。まずは……」

とト伝が言い終わる前に、背後から松永兵が二人に襲いかかった。

ト伝は刀で防ぐ。が、刀が折れてしまう。ここに来るまで何人も斬ったのだろう。無理もない。刀自体が保たなかったのだ。しかし、折れた刀で素早く相手の首筋を斬った。また信綱は初めから刀を持っておらず（途中で失われた）、掌底（しょうてい）で相手に胸元を一撃して怯んだ隙に脇差しを心の臓へ突き刺した。

さらに二人へ松永兵が襲いかかる。二人の危険を察した義輝が後方へ飛び、畳に突き刺してあった刀を二振り引き抜くと、そのまま二人に投げ渡した。

「師！童子切、大典太にござる！」

「ほう……これが……」

「…天下五剣か！」

刀を空中で受け取った二人はそのままの勢いで松永兵に斬撃を繰り出す。するとまるで豆腐を切ったかのように斬れるではないか。鎧もなにもあつたものではない。

「……見事な切れ味よ」

「塚原殿。悠長に感慨に浸っている時間はありませぬぞ」

「お…おお、そうであつたな。大樹公、我らが来た意味、分かるであらう？」

「御所よりの脱出。つまりは余に生きよ、と申されるか？」

「さてな。されど大樹公が脱出されなければ、儂と勢州はここで死んでしまふな」

ト伝の目が笑っていた。これを見て義輝は「師には敵わぬな」と呟き、死に場所と決めていた御所を脱出することに決めた。過程はどうあれ、大恩ある師二人を自分の運命に巻き込む訳にはいかない。

「北へ落ちる。よいな」

「はっ！」

義輝ら三人が走り出す。すると先ほどまで凍り付いていた一部の松永兵も動き出した。流石に逃がすわけにはいかないと感じたのだろう。しかし、義輝らに松永兵が追いつくことは出来なかった。松永兵は御所内は不案内であり、何処をどう曲がれば北口に出るか知っている義輝に敵わないこと。また何故か義輝が進む先には敵兵の姿はなかった。あるのは死骸だけである。これを不思議に思った義輝だったが、庭先に出たところでその答えに出会すことになった。武

士の集団が松永兵と戦っているのである。しかも武士の集団は皆が皆、目を見張るほど強く相手を圧倒していた。

「豊五郎！退くぞ！」

「叔父上！」

信綱が集団に加勢するが、信綱の加勢を必要としないほど既に一方的な展開だった。彼らが御所内の松永兵を倒したのだと義輝は理解した。

「彼らは柳生。我らの味方じゃ」

「柳生！？松永家中の者ではないですか！」

義輝は柳生の名を知っていた。何せ目の前にいる信綱本人から「柳生の者を弟子にしている」と以前に指南して貰っていた時期に聞いていたからだ。その柳生、今となっては当主である宗庵を始め主立った者は信綱に弟子入りしており、驚くべき戦闘集団へと変貌していた。それが今、義輝の味方として眼前にいる。

「細かいことは後じゃ。北門の近くに堀の一部がまだ普請中の場所があるじゃろう。そこから逃げるぞ」

義輝の住む二条御所は増築中であり、特に掘や土塁など外周部分を堅固にするために普請の最中だった。それもあらぬ襲撃に備えるためだったが、普請が終わる前に襲われるという結末に至ったのは皮肉としかいいようがない。

義輝一行が北へ走り出す。敵も追っては来るが、幸いにも四方に散らばっており、特に門周辺に集まっていたから向かう先に敵は殆どいなかった。（僅かにいた兵は全て斬り伏せられた）堀の隙間から

出り、土塁を飛び超えて路地に出る。流石に北門に陣取っている兵たちには見つかったているが、周囲にはそれほど敵の姿はない。とは言っても遠巻きにいるのだろうか。

「こちらへ」

柳生の手の者の一人が近くの民家に隠してあった馬を連れてくる。これで脱出しようというのだろうか、馬は四頭しかいなかった。

「公方様に付き従うは私と塚原殿。それに足田豊五郎の三名にござる」

「柳生の者は？」

「公方様もご存じのように柳生は松永の配下です。これ以上の手助けは宗厳殿の立場を思えば無理にござる。されど柳生の者が公方様をお助けしたこと、忘れぬようお願い致します」

「うむ、覚えておこう」

四人は馬に跨がり、東に向けて走り出した。もちろんこれを松永兵は追いかけることになるのだが、互いの距離は広がるばかりだった。洛中は暮盤の目のように整備されており、基本的に直線で走る事ができる。そこで差が出るのは馬の質であった。義輝たちが乗る馬は実のところ柳生の者が御所近くにあった將軍家の厩より拝借したものであり、地方の大名から献上された駿馬である。逆に追う松永兵は騎馬を許されたとはいえ身分の低い者が乗る駄馬であり、完全武装をしているために重い。その差が、距離となって現れていく。

義輝たちは五条大橋を越えて山科へ向かう。不思議とその先には三好勢の姿はなかった。何故なら、松永の使番に扮した柳生の者が、「將軍は伏見へ逃亡した」と偽りの報せを送り、義重と長逸は全軍を南へ向けていたからである。

【続く】

第一幕 天下争乱 - 將軍弒逆 - (後書き)

初投稿、やま次郎と申します。

元々こういう小説が好きでいろいろと妄想(笑)しているネタがいくつもあり、どこかで書いてみたいと思っておりまして。こうやって物語を書くのは初めてなのでアドバイスなど頂ければ幸いです。

また架空戦記なので史実と違う状況(設定)も今回の塚原ト伝、上泉信綱、柳生のように今後も現れます。史実の雰囲気なぶち壊すような真似はしないと思いますが、何せただの歴史好きなのでそこら辺はある程度広いお心で読んで頂ければと思います。

さて、参考までに永禄の変頃の各地の情勢を下記に書いておきます。

永禄八年(1565)

上方では三好長慶(前年に死去)が死んだばかりで権力の空白が起こっている。

中国では毛利元就が尼子の月山富田城を猛攻中。

東海では織田信長が美濃攻めの真つ最中。途中、伊勢にも手を出している。

甲信越では武田が上杉と直接対決から外交戦へと路線変更。上杉は関東重視の方針。

関東では北条家が对上杉、対里見戦で一進一退。

奥羽では伊達と最上が融和。蘆名が武田と組んで上杉にちよつかいを出している。

九州では大友が北九州を席卷中。島津は薩摩、龍造寺は肥前統一前。また今回の永禄の変で記述していない義輝の妻子がどうなったかで

すが、これは史実通りとしています。

生母・慶寿院 自害
正室・御台所 捕縛
側室・小侍従 殺害
子息・輝若丸ら三人（二人？） 殺害

最後に個人的なことです。好きな武将として「時代（条件）が違えば、評価の変わっていたらろう」という境遇の武将が好きだったりします。

例えば：

足利義輝（室町幕府が江戸幕府のように盤石なら名君？）

毛利隆元（毛利三矢が健在なら対織田戦線が変わった？）

織田信忠（信長が横死せず、普通に天下を引き継いでいたら？）

松平信康（切腹せず、関ヶ原あたりを迎えていたら？）

武田義信（彼が武田を継げば信玄のように四面楚歌に陥ることもなかった？）

長宗我部信親（彼が存命で関ヶ原を迎えていたら？）

三好秀次（彼が生きていれば家康の天下はなかった？）

ま、このように二代目辺り武将が好きなのですが、この辺りは次回作（もうかよっ！？）で書くかも知れませんが。あつ、でもオーソドックスに信長とかも好きですよ。（でも信玄よりは謙信の方が好きです。それは物語の途中からも出てくると思いますが…）

以上、今後とも宜しくです。

第二幕 脱出 - 明智十兵衛登場 -

逢坂の関。

二条御所より脱出した義輝ら一行は近江へ逃れるべく、是が非でも通らねばならない場所である。古来より都のある山城と近江を繋ぐ古い関所である逢坂の関は、近江国大津に在する三井寺の支配下にあり、親足利氏の立場にあるのだが、三好・松永らが義輝を襲うのであれば、この地に兵を配しているはずである。案の定、関所に三井寺の者は見えず、三好方と思われる兵士の姿が見える。三十人ほどだろうか、見えない位置にいる者も含まれば多くても倍の五、六十といると考えた方がいい。

「むづ……如何するか」

義輝は物陰に隠れて様子を窺っているが、はつきりいつて相当量の返り血を浴びている義輝たちの格好は異質であり、とてもすんなりと通れるとは思えない。かといっていずれは虚報で伏見辺りを彷徨っている三好・松永の追っ手も義輝の行方に気が付くはずであり、悠長に考えている時間はなかった。

「こうなれば強行突破しかないか……」

御所での壮絶な乱戦を思えば、この程度の戦いは容易に思えた。しかし、それを師ら二人に伝えようとしたところ、言葉が詰まった。

塚原卜伝と上泉信綱。この二人が肩で息をしていたのだ。特に卜伝の息切れが激しい。義輝は我に返った。二人はかなり高齢である。

信綱は六十手前、ト伝に至っては七十半場である。その二人が危険を顧みずに御所へ討ち入り、挙げ句ここまで騎馬で疾走してきたのである。壮年である自分ですら多少息を荒げているのだ。ここで強行突破をしようものなら自分は抜かれても師二人は力尽きて死ぬだろう。本来なら將軍である義輝は、師を犠牲にしても生きるべきなのだろう。しかし、それが出来ないのが義輝という人間だった。

そこへ、偵察に出ていた疋田豊五郎が戻ってきた。この男、信綱を叔父と呼んでいることから一族の者なのだろうが、歳は若く義輝と同年に思えた。剣の腕も申し分ない。頼りとするならこの男だろう。

「叔父上、意伯が戻って参りました」

「おお、間に合ったか！」

サツと豊五郎の後ろから意伯と呼ばれた男が現れる。

「公方様、紹介が遅れて申し訳ござらぬ。こちらは我が甥の疋田豊五郎。そして者は鈴木意伯と申し、二人とも我が門弟にござる」

「うむ、二人ともよき面構えじゃ。また豊五郎とやら、剣武の才は叔父譲りと見える」

「その御言葉、この豊五郎にとって最高の褒め言葉にございます」

豊五郎が深く頭を垂れる。その下の表情は言葉通り嬉しそうである。若さ故か、正直に顔に出ることは悪いことではない。義輝もそのことで多少は緊張が解れてきた。

だが意伯が戻ってきたのはただ義輝に紹介するためではない。

「もうまもなく大和へ向かっていた明智殿がここへ参ります。合流

後、関所を突破いたしましたしょう」

そう言うと、近くで集団が近づいてくる足音が聞こえた。足音の聞こえた方へ視線をやると、身なりの悪い十人程度の集団がこちらへ近づいてくる。咄嗟に刀の柄に手をやる義輝だったが、集団は五間（約10メートル）ほどの距離で止まると、先頭にいた一人だけが近づいてきた。

「このような格好で公方様に御前に参上いたすこと、お許しを。某は明智十兵衛光秀と申します。後ろの者らは皆、公方様の御味方にございます」

明智光秀と名乗る者の格好は粗末だが、物腰は穏やかで高位の武家の出であることが分かった。これが將軍家再興に大きな役割を果たすことになる光秀と義輝の初めての出会いであった。

「急ぎます故に概略のみ説明させて頂きます。まず私が敵の注意を引き、疋田殿、鈴木殿を先頭に後ろの者らが関所へ乱入いたします。公方様は塚原様と伊勢守様らと共に関所を抜けて下さりませ。坂本まで行けば、兵部大輔（細川藤孝）様の兵がおります」

「兵部が？」

義輝はここまでの一連の出来事を思い返し、疑問に思った。突如、御所を襲われた義輝。そこへ諸国を放浪しているはずの師二人が現れ、明智と名乗る者が関所突破の支援に来た。さらには腹心の細川藤孝が兵を率いて坂本にいるという。これが何を意味するのか、義輝には分かる。つまりは事前に三好・松永が暴挙に出ることが分かっていたのだ。ならば、なぜ自分に報せなかったのか？

そんな義輝の疑問を察したのか、光秀が答える。

「実は此度の襲撃、公方様ではなく覚慶様と周蒿様を狙ったものでした」

「なんじゃと!?!」

覚慶、周蒿とは義輝の弟たちのことだ。覚慶は興福寺、周蒿は相国寺で仏門に入っている。

「兵部大輔様は初め、これは三好・松永の公方様へ対する恫喝と考えました」

「で、あろうな」

昨今、將軍職は義輝の祖父・義澄の血統が受け継いでいる。義輝の父・義晴には兄弟がいないため、その血を受け継いでいるのは義輝の他は弟二人と義輝の子たちとなる。しかし、將軍職を受け継げる血統はもう一つあった。

十代將軍・義植の血統である。

義植と義澄は將軍職を争いあった間柄。一度は將軍職を追われた義植が西国最大の大名であった大内義興と細川高国の支援を受けて義澄を打ち倒し、將軍職に再任された。それをまた追い落とし、それが義晴である。それから義輝と將軍職は引き継がれているが、義植の血統は三好方の勢力圏で生き続けている。もし義輝兄弟、親子に何かあれば將軍職を継ぐは義植の血統となる。

「それを知ったのが二日前。公方様に仔細を御報せする間もなかった故、兵部大輔様は独断で我らを救出に差し向けました。その途上で襲撃の対象者に公方様が含まれていることを知り、周蒿様救出に向かっていた塚原様、上泉様、そして覚慶様救出に向かった我らが

急遽公方様の救出に向かった次第」

光秀の説明で概ね理解した義輝だったが、同時に弟たちの安否が気になった。

「ご安心あれ。覚慶様救出は和田伊賀守（惟政）様が、周蒿様救出には一色式部少輔（藤長）様が向かっております」

またしても光秀が義輝の心を察して答える。

「大樹公、時間が惜しい。積もる話は坂本に着いてからにしようぞ」
少しばかりの休憩で息を整えたト伝が促すように義輝へ話しかける。

「左様ですな。で、明智とやら。如何にして奴らの注意を引き付ける？」

「はっ！これにございます……」

光秀が後ろを向き、手招きで配下の者呼び寄せる。配下の者は、細長い木箱を担いでおり、光秀の隣にその木箱を置くと、蓋を開けて中身を取り出した。

「これは……鉄砲ではないか！？」

木箱の中に入っていたのは鉄砲だった。それも三挺。火薬、弾を込め、火薬を置き、火縄を付ける。射撃までの一連の動作を光秀は流れるように行う。それを三挺とも行う。

「公方様、参ります。御仕度を……」

「うむ」

光秀は鉄砲を抱えると関所から半町（約55メートル）ほどの距離まで近づく。まだ気づかれない。

配下が二挺を持ってついていく。まだ気づかれていない。

片膝をつき、狙いを定める。兵の一人がこちらの様子に気づいた。

火蓋を切り、発射態勢に入る。気づいた兵が指揮官らしき男へ報告する。

まだ撃たない。指揮官らしき男は周辺に指示を出している。

バンツ！

銃声がり、指揮官らしき男が倒れた。

「次ッ！」

光秀が配下から鉄砲を受け取ると、素早く射撃体勢に移る。

バンツ！

先ほどとは違い、即座に撃った。一人倒れる。

再び鉄砲を受け取り、構える、撃つ。もう一人倒れる。

「今じゃ！」

鉄砲を放り投げると、抜刀、配下に合図を出す。後方に控えていた

残る八人が一斉に弓を構え、放った。八本の矢が飛ぶ。しかし、どれも三好兵を仕留めるには至らない。だが兵たちは動揺している。

「うおおおお！！」

大きな喚声を上げ、豊五郎と意伯を先頭に武者たちが関所へ乗り込む。動揺している雑兵など豊五郎の敵ではない。即座に一人斬り伏せる、二人、三人と斬りつけた。それに負けずと意伯も二人を斬りつける。中には反撃してきた兵もいたが、力の入っていない斬撃は簡単に防がれ、返す刀で冥土へ送られた。

光秀配下の男たちも大いに暴れる。が、こちらはそれなりの腕は持つとはいえ屈強の者というわけではない。反撃を受けて負傷する者もいる。うち一人が手槍で肩を貫かれる。

そこへ義輝が騎馬で乗り込んできた。

横から割り込んで馬腹をそのまま三好兵にぶつけ、吹っ飛ばした。そして男の肩に刺さっている槍を刀で斬り落とした。

「あ……ありがとうございます……」

「よい。それよりも先へ行け。その怪我ではまともに戦えぬ」

「し……しかし……」

「構わぬ」

その言葉に男は躊躇する。男の使命は義輝を守ることであって、義輝を置いて先へ行くことなど出来ないのだ。

「大樹公の護衛は我らに任せよ」

同じく騎馬で関所に乗り込んできたト伝が義輝と同じように男へ脱出を促す。だがそれでも男はこの場を離れようとしなない。残った片腕で刀を構え、義輝を守ろうとする。

(この男も命を賭して余を守ろうとしておる……)

御所で多くの者が死んだ。苦難を共にしてきた忠臣たちが多く。そして名も知らぬ目の前の男の命も消えかけている。これ以上、自分のために他人を死なせたくない、という想いが込み上げてくる。

「ならば余から離れるな。余と共にあれば、死なせはせぬ」

と言つて義輝は騎馬から降りた。

「大樹公!？」

この行動にト伝と男は驚く。しかし、義輝は自ら敵兵に近づき、斬撃を振るう。やむ得ずト伝と信綱も馬から降りて義輝を追いかける。

將軍の存在に気づいた三好兵が一斉に義輝へ近づく。相手は四人。

「義輝公!!!」

義輝の下へ向かう敵兵に気づいた光秀も慌ててその場を離れる。

三好兵の一人が手槍を義輝に突き出す。身体を捻ってこれを避け、右手で槍を掴む。そのまま力任せに槍を引っ張ると、左手の刀で三好兵の喉元を斬り裂いた。血飛沫が飛び、義輝の身体を覆う。それに一瞬戸惑いを見せた兵たちを義輝はギロリと睨み付けた。

赤く染まった義輝の姿を見て、兵たちは怯えた。為す術もなく一人が斬られ、二人は駆けつけた信綱と光秀に斬られた。

「公方様ツ！御自身の立場を理解なされませ！」

まるで親が子を怒るかのようになり、信綱が義輝を叱責する。將軍に対し、このような物言いが許されるのは天下広しと言えど剣の師である信綱とト伝くらいだろう。

「皆の者、円陣を組め！」

光秀が指示を出し、全員が義輝のいる場所へ一斉に集まる。

「このまま一斉に東へ抜けます」

「……………それでよい」

光秀は敵に聞こえないよう周囲に小声で指示を出す。その様子を隣で見つめる義輝。

（この男……………、鉄砲が得手だけでなく剣術も達者ときた。しかもこの状況で適格に指揮を執るなど、一廉の将と見たが……………何者だ？兵部の家臣ではあるまい）

義輝は光秀に対し、強い興味を持った。光秀が藤孝の家臣ならば、何かしらの折に見かけたことがあるはずだったが、それはない。何処かの家中の者が藤孝に協力しているのだろうと思ったが、何処の家中か想像つかなかった。

義輝がそんなことを考えているなど露とも知らない光秀は、指示を出し終わると配下に合図を出した。

「行けッ！」

全員が一斉に東へ駆け出す。そうはさせまいと三好兵も立ち塞がるが、数こそ三好方が多かったが、その強さは義輝方が圧倒的だった。そもそもこの襲撃の指揮を執っている三好長逸は最初の襲撃で片が付くと考えており、この地に配していた兵は言わば形だけの存在であり、数を集めたただだった。名実ともに『劍豪』である義輝らとともに戦える者はいない。まさに圧倒的だった。このまま戦い続ければ三好兵を全滅させてしまうのではないかというほどに。しかし、義輝たちの目的は関所の突破であって敵の殲滅ではない。最初の一撃で包囲網が破られると、堰を切ったように義輝方が囲みを抜け出した。それを追う余裕は、三好方にはなかった。

負傷四名。義輝たちは一人の死者も出すことなく逢坂の関を突破した。この先は江南に勢力を持つ六角氏の勢力圏であるために容易に追っ手を差し向けることは出来ないと思われる。義輝は突然の襲撃から生還したのだ。

歴史が変わった瞬間だった。

【続く】

第二幕 脱出 - 明智十兵衛登場 - (後書き)

第二回、投稿です。

いや、文章を書くって難しいですね。戦闘シーンとかもう大変です。さて、早くも明智光秀登場です。本文中では何処かの家中と書いていますが、まあすぐに明らかになりますし、想像通りです。特に特別な設定はありません。(ただ早く登場させたかっただけ)

また更新頻度ですが、ある程度の構想は出来上がっているので上手く行けば1週間に1回(目標は2回)出来ればと思っています。良ければ続けて見て頂ければ嬉しいです。

第三幕 逃避行 - 三好・松永の追撃 -

五月十九日、夕刻。

大津の宿場で馬を手に入れた義輝一行は、近江坂本で細川兵部大輔藤孝の軍勢と合流した。

「上様！ご無事で！」

「おお、兵部！」

義輝の姿を確認した藤孝が駆け足で近寄る。また義輝も腹心の出迎えにようやく安堵感を覚えた。

「兵部の機転の御陰ぞ！大義じゃ！」

「いえ、上様の身を危険に晒してしまいました。この不始末……御詫びのしようがございませぬ」

藤孝が地面に額を擦りつけ、平蜘蛛の様に平伏して謝罪の言葉を口にする。

「よい……よいのじゃ。余はこの通り生きておる」

「はっ……。塚原様、伊勢守様、上様の御助け頂いた御恩、一生忘れませぬ」

藤孝は僅かに上体を上向け、義輝の両隣に控えるト伝と信綱に礼を述べる。

「それは違つぞ、兵部。恩を受けたのは余であり、そちではない」

と、言つと向き直り、義輝は自分の救出に尽力した者たちへ話しかける。

「塚原殿、信綱殿。これまで方々より頂いたものは数知れず、尚も窮地を救つて頂きました。その礼として、その童子切と大典太を差し上げます」

これには流石の二人も驚いた。童子切と大典太は義輝の持つ鬼丸国綱、二条御所で失われた三日月宗近、甲斐国久遠寺に納められている数珠丸と合わせて『天下五剣』と称されるほどの逸品である。それを下賜されることは、剣術家としては最高の誉れ。

「その二振りは天下の名刀。名刀は使い手を選びます。御二人であれば、申し分はござらぬ」

「左様か、ならば頂いておこつ」

素直に礼を受け取る信綱に対し、ト伝は刀を手にとって黙り込む。そして……

「儂は遠慮しておこつ。近く、まともに剣を振るうこと適わなくなる身じゃ。此度の事で、それがよう分かった」

「何を仰います！塚原殿の剣捌き、まこと見事なもの。まだまだ若い者には……」

「儂のことは儂が一番よう知っておる。だからといって信綱殿が貰うことにケチを付けているわけではない。儂が持つよりは、豊五郎そちが貰つておけ」

「わ…私がッ!？」

突然の指名を受けた豊五郎は思わず仰け反った。驚きで次の言葉が出ないほどに。

「無論、師の信綱殿と大樹公の許しがあればだがな」

「私なら構いませぬ。豊五郎の腕前、けしてその刀に劣らぬものと思っております」

「余も異存はない。豊五郎にも恩賞を与えなければならぬしな」

「は……有り難く頂戴いたしまする」

大きな体軀を小さくして刀を受け取る豊五郎。また鈴木意伯には義輝が持っていた正宗の脇差しが与えられた。

「さて明智にも何か褒美を与えねばならぬが、すまぬ。今の余にはそちに与えられるものがない」

「私など気にかけることもございませぬ。その御気持ちだけで嬉しゅうございます」

「そうか」

「それよりも公方様。まずはこの場を急ぎ離れましょう」

「ん？」

今いる坂本は六角氏の勢力圏内とはいえ、三好の勢力圏とも近く、奴らが將軍を襲うという暴挙に出た以上は何があっても不思議ではなかった。

「離れるということは、朽木谷か？」

朽木谷は湖西・近江高島郡に位置する將軍家の避難所である。先代の義晴も京を追われる度に坂本より朽木谷へ避難した。幼少期の義輝も同行している。

「は……。まずは」

「まずは……とは、如何なることじゃ？」

「実はこの光秀、朝倉家に仕えております」

「左衛門督にか？」

藤孝が補完するように話す。

「……ふむ」

義輝が考え込む。

越前一国を領する朝倉を頼ることは理解できなくもない。しかし義晴方として京に軍勢を送り込んでいた先代の孝景とは違い、現当主の左衛門督義景は上方の政情には一切の興味を示さず、義輝の協力要請を何度も理由を付けて断っていた。そのため、義輝は朝倉が今さらになつて自分を受け入れる意味が理解できないでいた。

「我が主は公方様を受け入れることを了承しております」

「まことか」

光秀はまるで以前から決まっていたかのように淡々と話す。実はこの時、光秀は嘘を言っていた。確かに光秀は朝倉家に仕えているが、義景は義輝がどのような状況下にあるかまったく知らないでいた。そもそも興味がないのだ。しかし、光秀には考えがあった。一方的に義輝が越前へ赴けば、義景は受け入れるしかない。

「う…む。ならばともかく朽木谷へ参るとしよう。兵部、案内を頼む」

「はっ、承知いたしました」

義輝一行は藤孝の軍勢に守られながら朽木谷を目指すことになった。

|||||||

京・三好政康邸。

將軍・義輝の暗殺に失敗した三好三人衆、松永親子が集まっていた。

「あれだけの軍勢を擁しておきながら將軍を取り逃がすとは何たる
ざまか！」

開口一番、松永弾正少弼久秀が実行犯である三好長逸らを罵った。
久秀には分かっているのだ。長逸が実子・久通に將軍暗殺の汚名を
着せるべく、積極的に兵を動かさなかつたことを。それが將軍を逃
がしてしまった最大の要因となつたことを。仮に三好勢が洛中に配
していた兵を全て將軍暗殺に向ければ、流石に義輝も命はなかつた
だろうことは明白だつた。

「ふん、貴様とて覺慶に逃げられておるではないか」

事実、久秀は担当していた興福寺の覺慶の捕縛に失敗しており、ま
んまと逃げられていた。が、この事自体は將軍に逃亡されたことと
訳が違う。

「將軍に逃げられることと、仏門に入っている弟に逃げられること
を同列に扱って貰っては困る」

二人は責任の擦り付け合いに終始している。何の意味もない会話だ。
それよりも今後、どうするかが問題であり、政康がその事を指摘し
た。

「まずは將軍の行方を捜さねばならぬ」

「將軍は逢坂関を通ったのであるう？ならば六角領に逃げ込んだのではないか？」

逢坂関で將軍一行らしき人物は通ったことは報せを受けていた。ならば先に義輝が京を追われた際、江南に勢力を持つ六角承禎（義賢）の援助を受けているので、今回もその伝手を頼ったものだと思われる。

「いや、それはない」

と、久秀が即座に否定する。

「なぜ言い切れる」

「六角領に將軍が逃れた、という報せを受けておらぬからだ」

「だからなぜそう言い切れるかと聞いておるのだッ！」

長逸が声を荒げる。しかし、久秀は惚けたまま答えようとしない。長逸は確かに三好一門ではあるが、久秀も前当主・長慶の娘の正室に迎えておりほぼ同格にある。現在の当主である義重から問われないう限り、仔細を明かさなくても良いのだ。（ちなみに義重はこの場にいらない）長逸は目的こそ同じ為に行動を共にしているが、久秀のこつという独断性の強いところを嫌っていた。

「それよりも將軍の御台を捕らえたと聞いた。まことか？」

「ん？ああ、確かに捕らえてはいるが……」

「ならば儂に渡して貰おう。使い道がある」

「それは構わんが、それよりも將軍の行方だ。このままでは拙い」

長逸にとって、將軍の御台などどうでもいい存在だった。それより

も將軍の息の根を止めなければ、今ある立場が危うい。それが大事だった。

「將軍は恐らく朽木谷だ。仕留める気があるのなら軍勢を遣わせ」

「朽木谷か：確かにその可能性もある。が、兵を出せば六角が黙ってはいまい」

「ああ、その心配はない」

なぜか六角のことになると久秀は確定的なことを言った。しかし、当の久秀自身がその問いに答える様なことはなかったために理由は定かではなかった。ただ久秀の言うことを事実として受け止めるしかなかった。將軍を京から追ったにも関わらず、長逸らは追い詰められていた。

「下野（政康）。阿波より義親（後の足利義栄）を呼び寄せておけ」「なに？しかし將軍は健在だぞ？」

「構わぬ。もはや將軍を討てるかどうかは問題ではない。時間との勝負だ」

三好三人衆と松永久秀の目論見は、將軍・義輝を暗殺し、阿波にいる足利公方・義親を新たな將軍へ据えることだった。言いなりにならない義輝に代わり、義親を將軍に天下を采配する。なに、酒と女を与えていれば何とでもなる。そう考えていた。

「わかった。ともかく我らは朽木谷へ兵を出す。それでいいのだから？」

長逸が久秀に確認する。語気から納得のしてないことは分かるが、久秀の言うとおりにするしか方法がないことを理解しているため、やむを得ず従う。

「ああ、それでよい。ともかく御台を我が屋敷に移して貰う。まずはそれを急げ」

そう一方的に命令した後、久秀は屋敷を退去した。最後まで久秀は將軍暗殺に失敗した我が子へ言葉をかけることはなかった。

五月二十一日。

近江高島郡・朽木谷城

この地で義輝はようやく一時の安息を得ることが出来た。この時までに、義輝には吉報と凶報の二つが届けられている。

吉報とは和田伊賀守が興福寺の覚慶救出に成功したということ。凶報とは一色藤長が相国寺の周蔭救出に失敗したこと、である。

またこの地に着くまでに剣術の師である塚原ト伝が単独で陣列を外れ、姿を消していた。これについてはそれほど気にはしなかった。元々気まぐれな人物であり、単に役目を果たしたから去って行っただけだろう。

しかし、この地での安息は義輝の気を一時でも休ませてはくれなかった。

（余はまんまと生き延びてしまった。家臣を見捨て、妻子を守れず……何が將軍ぞ！何が武家の棟梁か！）

義輝はこれまでのことについて自問自答を繰り返していた。だが前向きな答えは一向に出ない。不甲斐ない今の自分を許すことが出来ないのだ。

そこへ義輝を突き動かす一つの報せが入ってくる。

三好勢凡そ五〇〇〇、朽木谷を目指して行軍中。

瞬く間に城内は戦慄した。朽木家が擁する兵は最大で五〇〇ほどあり、まともに三好勢と戦える力はなかった。報せを受けただけで城内は混乱に陥り、誰もが義輝へ退去を進言してきた。しかし、義輝はそれらを一蹴する。

「狼狽えるでないわ！うぬら我が奉公衆であるう。三好輩など恐れるに足らず。堂々と迎え撃てばよい」

とは言ったものの、義輝もまともに戦って勝てるとは思っていない。しかし、もう逃げるのは嫌だった。それよりは堂々と戦い、死にたいと思っていた。そんな義輝の胸中を知らず、藤孝は朽木谷からの退去を諫言する。

「ここで戦っては無駄死にするだけです。そうならば塚原様らの働きが無に帰してしまいます！」

「それは……分かっておる！しかし余は、御所で家臣らに冥土で会おうと言った。このままおめおめと生き延びれば、あの世における妻子らにも寂しい想いをさせる」

義輝は軽い自暴自棄に陥っていた。安息の刻が義輝に考える間を与えたが、いくら考えても將軍暗殺に及んだ三好・松永らに勝てる方策は思い浮かばなかった。だから、ならば、とここで死ぬ決意を決

めたのだ。

「なりませぬ！なりませぬ！」

藤孝が必死に翻意を促す。しかし、義輝は一向に取り合わない。その間にも三好勢は朽木谷へ僅か一刻（二時間）のところまで迫っていた。

「良かった！間に合いました！」

そこへ明智光秀が飛び込んで来る。

「公方様！今すぐ越前へ御移り下さりませ。国境まで行けば朝倉左衛門尉（景紀）様が出迎えに参ります」

「光秀殿。それはまことか？」

その報せに藤孝が喜色を浮かべる。

「はっ！道中に浅井備前守（長政）様の御領地がありますが、通行の許可は得ております」

「なんと！」

光秀は義輝と共に朽木谷へ着いてすぐ、越前へ戻っていた。それより僅かに二日、朽木谷に戻ってきたばかりか出迎えの仕度を万端整えて来ていた。並の才能ではない。（実際は一乗谷まで行かずに敦賀の景紀を訪ね、浅井の小谷城へ赴いて船で琵琶湖を越えて朽木谷へ戻った）

「よい、明智。余はここに残る」

が、尚も義輝は動こうとしない。

「何故にございますか」

無礼と承知ながら、光秀は義輝へ理由を問いた。

「越前へ逃れたところで、余はまた三好から逃げ続ける日々を送るだけじゃ。奴らには勝てぬ。ならばそのような生き恥は晒しようない。ここで戦い、せめて一矢だけでも報いてくれる」

と、己の決意を告げる。が、光秀はそれをまったく意に介さずに自らの想いを述べた。

「勝てまする！」

「なに？」

「勝てる、と申しました！」

義輝は光秀の“勝てる”という言葉に心を動かされた。三好家との戦いは今回だけではない。天文一八年（1549）に三好長慶が管領・細川晴元を追った時よりずっと続いていることである。それから一六年、義輝はずっと三好家打倒に費やしてきた。その三好家にこの男はいとも簡単に“勝てる”という。心を惹かれない訳がなかった。

「朝倉は二万の兵を抱えております。また盟友・浅井も一万余の兵力を有しており、若狭には公方様の義弟・義統様があり、江南の六角殿も公方様の御味方でございます」

光秀は都合の良いことを言い続ける。確かに表向きは光秀の言うとおりだ。しかし、現実はそのはいかない。朝倉は加賀一向宗との交

戦中であり、二万の兵を上洛させることは不可能。また若狭も現当主の義統と前当主の信豊との間で内乱が起こっている。さらには浅井と六角の関係は最悪であり、將軍の命と言えど協力するとは思えなかった。しかし、光秀にとってはそんなことはどうでも良かった。都合の良いこと並べ立てても義輝へ翻意を促し、越前への動座に同意してくれればいいのだ。現に義輝の心は揺れ動いている。義輝としてはここで華々しく死ぬのも良いが、本音としては苦しめられてきた三好家を滅ぼし、妻子や家臣たちの仇を討ちたいという気持ちがある。それを光秀は知っていた。

「さらには越後の上杉様も、公方様の為に兵を動かされましょう」これがとどめの一撃となった。もちろん光秀は越後国主・上杉輝虎のことなんて全く知らない。知っているのは義輝の要請に答え、五千もの兵と共に上洛したということだけだ。しかし、そんな大名は全国の何処にもおらず、義輝が越後上杉を頼りとしていることは簡単に想像できた。

そのことを指摘された義輝も、胸中では“輝虎ならばあるいは…”という想いが無いわけではない。

「……………分かった。余は越前へ移る」

ようやく義輝が越前への動座に同意する。しかし。義輝には一つ心配の種があった。

「元綱。そなたも余と参れ」

朽木弥五郎元綱。この朽木谷一帯を治める領主であり、幕府奉公衆の一員である。既に奉公衆は瓦解しており、生きている者は僅かだ

ある。元綱はまだ十六であり、死なせたくなかった。

「いえ、公方様の御供をしたいところですが、朽木谷は我らの本貫にございます。当主たる私が離れる訳には参りませぬ」

「ならぬ！ならぬぞ！そなたが動かねば、余も動かぬ！」

これ以上、家臣を失いたくない義輝は、是が非でも元綱を連れて行くつもりだった。そこへまたしても光秀が助言する。

「元綱殿。我らはこれより公方様に伴って越前へ落ちます。まもなくこの地には三好勢が押し寄せて参りますが、いきなり攻撃を仕掛けるような真似はしないでしよう。降伏の素振りを見せ、半日だけ持ち堪えて頂きたい」

「半日？それで良いのか？」

「はい。半日たったところで、本当に降伏して下さって構いませぬ」
「しかし、奴らは公方様の居場所を聞き出そうとするのでは？」

「その時は正直に御答えになって下さい。越前におると」

「答えて良いのか？」

「ええ。そうすればこの地を追われることも命を取られることもありませんまい。どうせ三好が公方様の居場所知ったところで、何も出来ませぬ」

光秀の言うとおりだった。越前朝倉は二万の兵を抱える。京まで派兵するとなれば全軍を出すことは適わないが、越前国内で戦となれば嫌でも全軍を出す。しかも三好家が越前を攻めれば、後方を浅井家に衝かれることになり敗北は必至。その上で勝つには朝倉・浅井両方に備えるだけの兵力を差し向けるしかない。しかしただでさえ周辺国に敵を抱え、本国・阿波と海を隔てている三好家にそれだけの軍勢を越前へ送ることは不可能だった。

「見事じゃ！明智！」

光秀の見事な策に義輝は素直に感動を覚えた。自らの胸中を図り、それらを解決する策だったからだ。

「兵部。各地に散らばっておる者どもらに余が越前へおることを伝えい。越前にて再起を図るぞ！」

「はっ！承知！」

光秀の策で立ち直った義輝の言葉で全員が外に出る。己の役目を忠実に果たすために。

こうして義輝ら一行はようやく辿り着いた朽木谷の地から越前に移るようになった。

【続く】

第三幕 逃避行 - 三好・松永の追撃 - (後書き)

第二幕ですが、第三回です。(ややこしいですね)

義輝が越前へ移るのは史実の義昭に沿ったことです。(若狭經由ではありませんが…) 將軍でなかった義昭を受け入れたのですから、將軍たる義輝を受け入れないわけがない。そう思いました。まあ本文中では光秀の独断ということになっていますが、史実でも動きを見せなかった義景のことです。こういう展開もありかと。

またいきなり義輝の許を去った塚原ト伝ですが、ネタバレしますが本編中ではもう登場しません。(年齢が年齢ですし)ただ時間と連載が進めば補完的にト伝が主人公の外伝を書くかも知れませんが、あまり期待しないで下さい。(信綱の方はもう少し活躍します)

追記

初投稿作品で使い方に慣れず、タイトルが分かりづらく(第三回なのに二幕とか)なっていたのを修正しました。

第四幕 越前朝倉 - 一乗谷評定 -

五月二十四日。

越前・一乗谷城。

日も落ちた頃に義輝は敦賀郡司・朝倉景紀の軍勢に守られながら朝倉氏の本拠・一乗谷へ入った。とりあえず義輝は城下の安養寺へ案内された。

翌朝、義輝は寺の庭先から一乗谷を眺めた。

朝倉家は初代越前守護・朝倉敏景が一乗谷へ本拠を移してより凡そ百年、この地から越前を治めている。本拠たる一乗谷城は一乗山の尾根に長く築かれており、南北半里強もの大きさを誇る。足羽川を天然の堀とし、東・西・南は山に囲まれている。まさに鉄壁。

昨夜は暗くて分からなかったが、翌朝になって一乗谷の大きさが一望できた。また城下の賑わいも流石に京ほどではないが、相当なものだ。かなりの人間が住んでいるだろう。

（朝倉左衛門督……侮っておったが、一乗谷がこれほど繁栄しておるとは……。案外、期待できるやもしれぬ）

朝倉二万を自在に操るほどの男ならば、対三好戦の中核を担える。そう思った義輝であったが、そうそうに期待を裏切られることになる。

正午を迎える手前、左衛門督義景が家臣団を引き連れてやって来た。形式的な挨拶を受けた後に評定を開くことになっている。もちろん

三好討伐についてだ。

現れた義景の姿を見て、義輝は啞然とした。

(まるで公家ではないか……)

華奢な体躯におっとりとした顔つき。顔色も青白く何より目が死んでいる。義景の姿に、戦国武将たる威厳はまったく感じられなかった。

反面、朝倉家臣から見た義輝の印象は違った。

体躯は平均よりやや大きい程度だが、筋肉質な身体は戦国武将に足るものであり、顔には真新しい刀創、眼光は鋭い。また生まれからくる高貴さも漂わせている。何より数日前まで死闘を演じていた義輝からは覇気が溢れていた。

「左衛門督義景にございます。まずは上様が御無事であったこと、祝着に存じます」

義景が挨拶する。それに対し、

(征夷大將軍ともあろう者が、命からがら恥も外聞もなく京を追われて何が祝着なものか！)

と胸中で叫ぶ義輝だった。

「うむ。余は此度、不覚にも京を追われたが、再び京に戻り、逆賊を討ち滅ぼす覚悟である。その為にも左衛門督の力、頼りにしておくぞ」

しかし、こう言わなければならない今の己の無力さを呪うしかなかった。

「勿体無きお言葉にございます。当家に全て御任せあれ。必ずや京への道、この義景が切り開いて御覧に入れましょう」

そう義景が立派に決意表明するが、その語気にはまったく力が入っていない。義輝は落胆した。これでは朝倉の兵も頼りにならない。そう思ったが、義景の後ろに控える家臣団の中にはそれなりに骨のありそうな者も垣間見えた。朝倉家とて無為に百年もの間、越前を治めていたわけではない。当主が戦に出ずとも、名将として武名を轟かせた朝倉照葉宗滴が鍛え上げし軍団は未だに健在だった。

「上様は帰洛を求めてござる。よって上様が京へ戻られるための策を講じて頂きたい」

いよいよ評定が始まった。藤孝が進行を行う。その手始めに義景に対し、意見を求めた。

「当家が声をかければ、近江の浅井が合力することは必定にございます」

が、中身は乏しいものだった。

浅井長政。江北三郡を治める若き太守である。永禄三年（1560）に起こった野良田合戦では六角軍二万五〇〇〇を一万一〇〇〇で破ったことは記憶に新しい。しかもこの戦、長政にとっては初陣であり、このように華々しく初陣を飾った例は珍しい。そんなことだから、義輝自身も長政には期待を持っている。しかし、朝倉と浅井が

仲が良いことは誰もが知っていることだった。

(他に案はないのか)

義輝と藤孝も朝倉・浅井の両家連合を基礎に物事を考えている。だが義景はそこしか考えていなかった。そこから先の案なんて、義景にはない。何故なら義景自身、二日前まで義輝が自分のところに来るなんて思っていないく、二日前に景紀から報せを受け、もうこちらへ向かっているというから受け入れるしかなかった。義輝の手前、『迷惑だから出て行け』とは言えないだけなのだ。それでも二日間は考える時間があったのだから、少なからず何か案が出てきてもよいはずなのだが、元よりそんな智恵は義景になかった。

(それでもようも『当家に全て御任せあれ』などと言えたものだ)

そもそも朝倉は長年に亘って浅井家としか同盟しておらず、朝倉・浅井で何事も何とかなると考える風潮がある。今回のことも朝倉首脳陣はそれ以上のことは考えていなかった。

「皆々方、三好・松永を侮ってはなりません。先年、教興寺の合戦で三好修理(長慶)が動員し軍勢は、六万にも及びます。それを念頭に、策を講じられたい」

藤孝の話に場がざわめく。

無理もない。朝倉と浅井が上洛に動員できる兵は凡そ二万余である。それですら大軍なのだが、相手はその三倍の兵となると怖じ気づきもする。しかし、義輝も藤孝も今の三好に六万もの兵が動員できるとは思っていない。

三好の版図は全盛期から大きく変化していないが、三好長慶を失っている。この事で上方の反三好勢力が勢いづいており、その中核が義輝なのだ。機先を制されて京を追われはしたが、反三好勢力はどれも健在。もし義輝が朝倉・浅井と上洛軍を発しても、全軍をこちらへ向けることは出来ないだろう。せいぜい三万数千、これが義輝の見立てだ。

「恐れながら……」

末席で一人の武者が声を上げる。

「何者か？」

「左衛門尉景紀の子、景恒にございます」

朝倉景恒。昨年の加賀攻めで兄を亡くし、敦賀郡司職を継いでいる若き一門である。

「景恒。上様の御前ぞ。若輩者が出しゃばるでないわ」

上席から声が飛ぶ。一門衆の筆頭として紹介された朝倉式部大輔景鏡（かげあきら）である。この発言に景恒の父・景紀も眉をしかめている。この両者、仲が悪いのだ。それも景恒の兄が加賀攻めの陣内で景鏡との口論の末に自害したからだ。

「よい。考えがあるのなら申すが良い」

義輝が制す。

見苦しい。そう義輝は感じたのだ。意見があるのなら言えば良い。それがどんな者でもだ。でなければ評定に参加している意味がない

というもの。それに若い者なら尚さら聞いてやらねば不満は溜まる一方となる。本来ならばこれを制するのは当主たる義景の役目なのだが、当の義景は景鏡寄りの考えのようで、義輝の裁定に不満があるようだ。表情は僅かにしか変わっていないが、分かる。生まれてよりずっと人の顔色を窺って生きて来なければならなかった義輝だ。このくらいは読める。

発言を許された景恒は揚々と話し始める。

「まずは若狭に兵を入れるべきかと」

「若狭へ？」

「はつ。若狭は今、守護の義統殿と先代の信豊殿が争っております」「うむ。知っております」

「義統方には当家が、信豊方には三好が支援しております」

「それも知っております」

要は若狭において朝倉と三好が代理戦争を行っているのだ。現時点では義統方が優勢。しかし、予断を許さない状況にある。

「もし当家が公方様を戴いて上洛した場合、信豊方に背後を脅かされる可能性がございます。その前に、若狭を完全に義統殿でまとめる必要があります」

「そうすれば、上洛の折に若狭の兵をも使えるか」

「御意」

流石に若狭と接する敦賀郡を治める景恒だ。若狭の事情に明るい。多くは父の景紀が手にしたものだろつが、着眼点は評価できる。

「されど余としても出来るだけ早く上洛したい。早々に若狭の争乱を鎮められるか？」

「公方様の御出馬があれば……あるいは」

自らの出馬。それは義輝も上洛まで考えていなかった。

「控えい！公方様に出馬を求めるとは凶に乗るでないわ！」

「そうじゃ！そうじゃ！」

席上から景恒に向けて野次が飛ぶ。どれも景鏡派の者たちだろう。やはり見苦しい。これで上洛が叶うのか。そう思う義輝だったが、景恒の案は捨て難い。義統は義弟であり、若狭に自らの影響力を強めるために出て行った方がよいかも知れない。

「よい。余が出向こう。仕度を頼む」

「はっ！はっ！！」

景恒が頭をぶつけるのではないかと思うほど、勢いよく頭を垂れた。よほど嬉しかったのだろう。それほどまでに景恒は家中で孤立していたのだ。義輝の同意が得られたことで、今回の若狭出兵は景恒が采配できる。加賀攻めではないが、兄の無念も少しは晴れる。そう思った。

「公方様。上洛を目指すには、加賀一向宗との和睦が不可欠にございます」

今度は景鏡が意見を述べてくる。元々持っていた意見なのか、景恒に遅れまいとしたのかは分からないが。

「我らが越前を留守にすれば、一向宗が国内に雪崩れ込んでくる」とは必定にございます」

「で、如何にすればよい」

「当家を加賀守護に任じて頂けないでしょうか。その上で加賀へ攻め入り……」

「それでは火に油を注ぐだけであろう」

「そ…それは……」

言葉が詰まる。結局は景恒の意見が取り入れられたのに触発されて発言しただけだったか。自尊心が強い。それだけの人物。それが義輝の景鏡評になった。その景鏡が大きな顔をしていられる家中など、やはり底が知れている。

「事を荒立てる必要はない。要は余が上洛する間、じっとしてくればよいのだ。奴らの大半は農民がほとんど。こちらから攻め入り、田畑が荒らされる心配がないと分かれば和睦にも応じよう」

この件については、余計な事情を挟まないためにも藤孝にやらせることにした。幕臣が直接出向き、やりとりをした方が相手の感情を刺激しないだけ和睦はまとまり易いだろうと思われた。

（されど、若狭を手に入れたとしても兵が足りぬ。左衛門督も思ったほど頼りにならぬし、やはり頼りにすべきは……）

義輝は静かに目を瞑った。脳裏に思い浮かべたのは二人の人物だった。

【続く】

第四幕 越前朝倉 - 一乗谷評定 - (後書き)

第四回です。

ここまで順調に書き上がりました。このペースを続けたいところです。

また今回まで義輝の呼称が様々で分かり辛いと思います。(そうでもない?)

上様：直臣(藤孝) や守護大名クラス(義景)

公方様(義輝公)：陪臣(光秀や朝倉家臣)

大樹公：身分に関係のない者(ト伝など)

という分け方になっています。(ただ信綱の場合、武家に仕えていた名残で公方と呼称しています)ま、雰囲気を変える場面もあります
が…

追記

初投稿作品で使い方に慣れず、タイトルが分かりづらく(第三回なのに二幕とか)なっていたのを修正しました。

第五幕 希望 - 上洛への道 -

越前一乗谷。

評定は未だ続いていた。

「上洛するとなれば、やはり六角殿へ支援を頼むべきであろう」

「されど六角と浅井は敵対しておるぞ」

「そこは公方様に取りなして頂くしかあるまい」

話題は六角家についてだった。

湖西を通るにしろ、湖東を通るにしろ上洛を目指すならば必ず六角領を通ることになる。そのためには江南に勢力をもつ六角家の支援は不可欠である。しかし、朝倉の家臣たちが考えるほど義輝は六角承偵を頼りとはしていなかった。

六角家はそもそもずっと義輝方として三好家と戦い続けており、江南では今でも大きな勢力を誇っている。義輝方の最有力と言っても過言ではない。それは間違いない。それなのに、なぜ義輝は六角に期待していないのか。その原因はこれまでの経緯にあった。

六角承偵は何度か三好家に勝っている。永禄元年（1558）に義輝が帰洛を果たしたのは承偵の御陰であると言えるし、教興寺合戦の前哨戦である將軍地蔵山の合戦では三好方に勝利し、久米田合戦では長慶がもつとも信頼する実弟・三好義賢を討ち取っている。しかし、何故か承偵はその後に軍勢の動きを鈍らせ、最終的に教興寺合戦で義輝方（六角・畠山連合軍）は敗北し、三好の天下を決定づけた。

(ここ一番であやつは頼りにならぬ)

もし教興寺合戦で承偵が畠山軍支援に動いていたら、そう思わなかったことはなかった。

「その話はもうよい。承偵には遣いを出す。兵を出すとなれば申し分ないが、領地の通行を認めるだけでも構わぬ」

堂々巡りの議論をここで続けていても埒はないと思った義輝は、決定を下した。

「されど上様。六角殿の支援なくば三好の兵を上回ること叶いませぬ」

藤孝の指摘通りだった。

皆の脳裏には、朝倉・浅井で二万。若狭勢が三千。これに六角勢を加えることによって三好に対抗できると考えている。

「分かっておる。されど、当てがないわけではあるまい」

「と、仰いますと?」

「ほれ。朽木谷で明智が申しておっただろうが」

「まさか……上杉!？」

上杉の名が出ると、場がどよめいた。上杉の名は、朝倉家中でもよく知られている。朝倉にとって正式な同盟国は浅井家だけだが、上杉家とは加賀を中心に勢力を有する一向一揆との戦で何度も連携している。また永禄二年(1559)に上杉輝虎が上洛した際には北陸道を通っており、領地の通行許可を与えた朝倉家へ礼を言うため一乗谷も訪れていた。

「されど上杉様は越後。上方まで来られるかどうか……」

「無理は承知じゃ。輝虎も余が任じた関東管領職を全うするため、信濃や関東へと忙しく働いておろう。そんな輝虎に頼むが心苦しくはあるが、余の苦境を訴えるしかあるまい。あの折と同じく、五千でも構わぬ。強兵たる越後兵ならば、万騎に値しよう」

この発言には義景を含め、朝倉家臣は驚いた。義輝は輝虎へ対し『上洛して来い』と命じるのではなく、『来て欲しい』と頼むのだという。これほどまでに将軍が臣下の者に謙ることは珍しい。正直、義景としてもこの自家との扱いの差はいい気はしなかった。

本来ならば義輝にとってここで義景の機嫌を損ねることは良いことではないのだが、無視した。どうせ今のままでは上洛は叶わない。それよりは他を特別扱いしているところを見せ、奮起してくれた方がいい、と。

だが問題は誰を遣わすかだった。上杉家との連絡役は大館晴光が務めていたが、先月に亡くなっていた。また他の幕臣たちは多くが二条御所で討ち死にしたか、離散しているために今は藤孝しかない。この地で待っていていれば誰かしら帰参してくるだろうが、誰がいつ来るか分からないのを待っていても仕方がない。

そんな義輝の心中を察したのか、今まで沈黙を守っていた信綱が志願を申し出た。

「儂が越後へ参りましょう」

「勢州殿が？」

信綱は本来、最後まで何も発言しないつもりだった。そもそも幕臣

でもない自分がこの場にいることが相応しいとは思っていないのだ。しかし、あまりにも義輝側の人間が少ないので藤孝から評定への参加を要請され、末席から評定の行方を見守っていた。

「管領様とは関東出陣の折、面識がございます。それに関東へ出馬されているやもしれませぬからな。関東であれば、儂は地理にも明るうござる」

信綱は元々関東管領・山内上杉家の重臣長野家に仕えていた。長野家は上杉家を継いだ輝虎にも従っており、永禄三年（1560）の関東出陣では長野家も輝虎に従っており、剣豪としても長野十六槍としても武名を轟かせていた信綱は輝虎の目に止まっていた。翌年に小田原城を攻めて鶴岡八幡宮で関東管領に就任し、越後へ戻るまで何度か信綱は輝虎と酒を酌み交わし、太刀合いも行った。

「勢州殿であれば申し分ない。是非にも」

「合い分かった。されど儂も何度も越後との間を往来するわけには参りませぬぞ。後任は、定めておいて頂きたい」

「承知した」

こうして上杉輝虎の許へは信綱が派遣されることになった。後は輝虎の動向次第で上洛時期を定め、上方にいる反三好の勢力に声をかけるだけ。そう誰もが思った。義輝以外は……

「もう一人、声をかけておきたい者がある。輝虎が上洛できぬともこやつが味方となれば三好を討ち破れるやも知れぬ」

「はて？何処の大名ですかな」

「誰もわからぬか？」

皆が考え込む。関東管領たる上杉の代わりになるような大名。義輝

の口振りからすると、こちらと軍勢を合流できる大名に思えるが、甲斐の武田に駿河の今川、西国の毛利と名が上がるがいずれも上洛軍を起こせるような者たちではない。結局、誰も答えを見つけない事が出来ず、義輝が口を開いた。

「織田、信長よ」

「の…信長!？」

意外な名前に皆が驚き、様々な反応を見せるが、中でも義景が一瞬だけ露骨に嫌そうな顔をしたのを義輝は見逃さなかった。

「左衛門督。何ぞあるか？」

「いえ、織田など頼りにならぬかと思ひまして…」

「余は一度、上総介（信長）に会ったが、なかなかの大将であつたぞ」

永禄二年（1559）。この年の初めに義輝は全国の諸大名に上洛を命じた。表向きは義輝の帰洛を祝うものであつたが、その実が打倒三好であつたことは改めて言うまでもない。そして真つ先に上洛してきたのが尾張の織田信長だつた。この事を義輝は評価しているのだ。ちなみにその次に上洛してきたのが当時長尾景虎と称していた上杉輝虎である。

一方で義景は信長が嫌いだつた。かといつて、二人は会つたことがあるわけではない。不満の原因は、朝倉家と織田家の出自にあつた。

両家の共通点は共に斯波家の家臣だつたこと。朝倉家は斯波家が守護を務める越前の守護代であり、織田家は尾張の守護代である。しかし、義景は守護代の家系だが信長は守護代家老の家系だつた。よつて信長の方が一段格下となる。ただ信長側にも言い分はある。朝

倉家は応仁の乱の時、主家である斯波家を裏切って越前守護へ昇格したが、織田家は尾張で斯波家を支え続けた。なので勝手に格下にされる云われはないが、自分が上と思っっている義景にはその理屈は通じない。

だが義景が信長をどう思おうが、今の信長は尾張一国に伊勢と美濃の一部を領している。上洛してきたときは未知の武将だったが、翌年に桶狭間で東海三カ国を治める今川治部大輔義元率いる軍勢を寡兵にて討ち破ったことによりその将器が本物であることが証明されている。無視できない勢力だ。

「織田家であれば、某を御遣わし下さい。必ずや御味方に引き入れて御覧に入れまする」

「明智か」

義輝との連絡役を務めていた光秀も、この場に参加している。しかし信綱とは違う理由、客分という身分の低さから今まで一切発言をしていなかった。義輝はその光秀が突然に織田家との使者へ志願してきた理由を掴みかねた。

「織田様の御正室・帰蝶様と某は従兄妹同士でありますれば……」
「なんと!？」

これには義輝はもちろんのこと、朝倉の者たちも驚いた。義景などは『そのようなこと聞いておらぬぞ』と心の中で叫んでいることだろう。

(こやつ……左様な奇縁を持つておったか)

光秀のことを義輝は元々それなりの武家の出だろうと思っっていたが、

大名の正室と血縁関係にあるほどだとは思わなかった。そもそもそんな者が、光秀ほどの才を持つ者が何故いつまでも客分のままなのか。

（余ならばすぐにでも直臣として召し抱えるが、左衛門督はとんだ阿呆じゃ）

この時、義輝は初めて光秀が欲しいと思った。

「ならば明智、許す。そちが使者を務めい」

「されば公方様に御許し頂きたいことがございます」

「なんじゃ」

「場合によつては美濃守護職、織田様に任せること御許し下さい」

「ふむ…」

悪い手ではない、と義輝は思った。既に尾張の支配権は信長に認められており、織田家は將軍公認の守護大名である。一方で美濃を領す斎藤龍興も父・義龍の頃に認められて相伴衆に列している。

（最良なのは余の調停の許で両者が和解し、共に上洛軍を発してくれることだが…）

そう都合良くいくことなど考えない方がいいと義輝は思った。あまりにも虫が良すぎる。ならば一方に濃尾を任せるしかない。上洛後、濃尾にまとまった義輝方の勢力があれば強力な後ろ盾になることも考えられた。

（斎藤龍興は酒色に耽り、家臣の竹中某に居城を追われたと聞く。そんな男に美濃を任せるよりは……）

義輝も認めた先代の義龍が生きていれば違ったかも知れないが、信長と龍興では圧倒的に器が違いすぎた。

「よい、許す。一切を明智に任せる故、必ずや織田を余の味方に引き込めい」

「ははっ！」

平伏する光秀。そこに反応したように義景が飛び出てくる。

「お…お待ち下され！」

「なんじゃ、左衛門督」

「軽々しく守護職を任せるものではありません。織田風情に守護は荷が重うございます」

嫉妬、妬み、そういったものが義景の中を支配していた。が、義輝はそんなものに目もくれず…

「不服か。そなた家臣とて、先ほど軽々しく加賀守護に任じて欲しいと願い出て参ったではないか」

「そ…それは……」

義景がキツと景鏡を睨み付ける。一方で景鏡もばつを悪そうに目を逸らしている。

「それに必ずしも上総介に美濃守護を任せるといった話ではない。明智も場合によっては、と申しておろう。そうであるな、明智よ」

「はっ。美濃守護職はあくまで織田様を御味方に取り込むため、交渉の材料にたく申したまにございます」

「だ、そうだ」

「そ…それならば構いませぬが……」

納得したようではない義景が渋々引き下がる。その姿を見て、義輝は改めて義景を頼りなく思った。

（もつともそんな手に乗ってくるほど上総介は阿呆ではあるまい）

そんな浅はかな男ならば、初めから頼りになるわけがない。恐らく織田上総介という男は、そんなに甘くはないはずだ。それに頼りになる男なら、方便でなく本当に美濃守護を任せてもいいと義輝は思っていた。

（輝虎と信長……余の命運はあやつらに懸かっているのやもしれぬな）

義輝はかつて一度だけ会った男たちの顔を思い出していた。

そして評定が終わった。

【続く】

第五幕 希望 ・ 上洛への道 ・ (後書き)

少し間が空きました第五幕です。

今回は序章最終幕。今回の話にあった信長と謙信が登場します。

第六幕 将星二つ - 軍神と大うつけ -

六月二日。

尾張国・小牧山城

尾張の国府である清洲より東北にある小牧山に築かれた城はその山全体を城郭と化しており、多数の曲輪が点在、配下の將の屋敷が建ち並び、南西一帯には城下町も形成されている。主力の兵も置いており、凡そ二年前に築かれたとは思えないほどの賑わいがあった。信長の美濃経略における最前線基地とした意気込みが感じられる。実際、美濃斎藤家の本拠たる稲葉山城とは僅か四里（16km）ほどしか離れておらず、敵対勢力同士の本拠地がこれほど近いのは異例だった。

その地に、大うつけと呼ばれた織田上総介信長はいる。

「御屋形様。明智十兵衛と名乗る者が目通りを求めております」

「明智…とな？」

「はつ。何でも帰蝶様に縁がある者とか。追い返しましょうか？」

「いや、よい。すぐにこちらへ通せ。それと於濃（帰蝶）も呼べ。身内とならば、会いたかろう」

信長は簡単に目通りを許した。自身の室のことを思っただけではない。帰蝶の縁者となれば美濃の出身、美濃攻略に有益な情報が得られるかもしれないと考えたからだ。

小姓は信長の前から下がると、先に入ってきたのは帰蝶だった。

「殿。十兵衛殿が参られたとか？」

「うむ。間もなく参るであろう。そちの縁者と聞いた」

「はい。我が母の甥に当たる方です。私が殿の許へ嫁ぐ前までは稲葉山のお城で何度か会ったことがございます」

「で、あるか」

帰蝶の母、つまりは斎藤道三の正室は小見の方と言い、光秀の父である明智光綱は兄に当たる。ちなみに両者とも死没している。

「御屋形様。明智殿を御連れしました」

「入れ」

襖がサツと開けられる。その先に平伏する一人の男へ信長の視線は送られる。

「明智十兵衛光秀にございます」

「で、あるか」

たったそれだけで両者の挨拶は終わる。信長は何も話さない。それだけだったにも関わらず、光秀の額には冷や汗が滲み出ていた。鋭い眼光を叩きつけられている。部屋中の空気が張り付き、凝縮するような感覚だけがヒシヒシと伝わってくる。

(な…なんだ、この威圧感は……)

それが、光秀の抱く信長の第一印象だった。言葉が詰まっている光秀を案じ、帰蝶が助け船を出した。

「十兵衛殿。長良川の合戦の折、一家が離散したと聞き案じておりました。こうして再びお会いできたこと、嬉しゅうございますよ」「は…はっ。帰蝶様も御健勝のようでご覧にございます」

その時、光秀は初めて帰蝶がいることを知った。正直、声をかけてくれたことを感謝した。見知った人間の声を聞いたことで少し緊張が解れた光秀はようやく話に入ることが出来た。

「此度は將軍家の使者としてまかり越した次第にございます」
「將軍家とな？……義輝公は御健在ということか」

信長がこう思うのも、巷では義輝は三好・松永に暗殺されたという噂が蔓延していたからだ。光秀も道中でそれを聞き、知っている。ただ余りにも噂の広がり方が異常なので信長自身は真偽を掴みかねていた。

「義輝公は兵を求めておられるのか」
「はっ」

いきなり本題を突かれた光秀は驚いたが、話が早くて助かるとも思った。信長としては義輝が生きていて自分に使者を送ったという事実から導き出した発言に過ぎず、無駄な問答を省いただけだった。

「公方様は越前におられます。近く上洛し、逆賊を討ち平らげる所存なれば、織田様にも逆賊征討の軍へ加わらることを望んでおられます」

「当家は今、美濃攻めの真っ最中である」

信長は兵を出せる出せないとは言わず、織田家の現状を語った。これが断り文句であることくらい光秀も分かる。しかし使者を務めると己で言い出した以上は、簡単に引き下がる訳にはいかない。

「斎藤家との和睦、公方様が取りなしても構わないと申しております

す

和睦のことは義輝と話してはいない光秀だったが、一切を任せると言われている以上は許容の範囲と捉えている。しかし、信長は和睦の提案を即座に拒否した。

「何故にございますか？」

「そなたも蝮殿（斎藤道三）に仕えていたのなら知っておろう。美濃は蝮殿より儂に譲られておる。龍興は不当にも美濃を占拠した義龍が子、また仇だ」

道三が長良川合戦で実子・義龍に敗れて自害する寸前、女婿の信長へ“美濃を譲る”という遺言を書き残した。それが信長の美濃攻略の大義名分でもあるし、そのために信長は広くそれを流布させた。そのために光秀もこのことは知っている。

「そこを曲げては頂けませぬでしょうか。公方様のことは、天下の大事にございます」

信長が美濃攻めに拘る気持ちは光秀にも分かる。光秀としても道三を慕っていたのだから、龍興は美濃国主に相応しくないと思っている。ただ、だからと言って光秀も引き下がるわけにはいかない。信長に何とか考え直して貰おうと必死に説得を続けるが。

「明智とやら。貴様は岳父の仇討ちを小事と申すか」

「い、いえ…そのようなつもりは…！！？」

即座に平伏し、謝罪する。だが怒ったかに見えた信長の傍らで帰蝶が二人のやり取りを見て『くすくす』と楽しそうに笑って見ていた。

「殿。十兵衛殿をからかうのはその辺にしたら如何です？」

信長に嫁いで十六年。織田三郎信長の人となりを見蝶は承知している。世間で言われている以上に気むずかしい人物であるが、岳父・道三を尊敬している。ただけして仇討ちなどに囚われる人物ではない。何事も合理的に動く人物だ。美濃を獲るために信長が道三の仇討ちを利用していることを見蝶は知っているし、美濃を獲るのは上洛をするためとも知っている。

「わかった、わかった。明智とやら、儂は三好・松永なぞに与する気はない。義輝公に御味方仕ると伝えてくれ」

「有り難き御言葉、しかと公方様へ御伝え致します」

初めは難航すると思われた交渉が、見蝶の御陰で意外にも簡単に進んだ。もはや頼れるものはないと考えていた自身の縁にこれほど感謝したことはない。しかし、光秀は戦国武将のしたたかなる一面を承知している。未だ信長から“兵を出す”との言葉が告げられていないことを忘れてはいない。

「つまり兵を出して頂けると考えて宜しゅうございますか」

「構わぬ」

だがこれも簡単に目的の言葉を引き出せた。どうやら織田信長という男、根は単純なようだ。しかし、まだ引き下がるわけにはいかない。ただ兵を出すだけでは、数百でも一千でも兵を出したことになるからだ。実際にそうやって約束を守ったことにする大名もいた。それでは何の意味も無い。

「されば兵一万を御願ひ申し上げます」

兵数を指定するということは臣下の者へ対する扱い方であるが、あくまで自身は將軍の使者であるので失礼には当たらないと光秀は考えている。それに織田家なら一万ほどは軽く出せる力を有しているし、一万は出して貰わなければ三好の兵力を上回ることは出来ない。しかし、これに信長は難色を示した。

「当家の事情は知っております。兵数の約束まで出来ると思っておりますか」
「承知しております。されど御約束を頂ければ、公方様も御安心召されるかと」

「義輝公へ嘘は申せぬ」
「ならば御家の御事情が変われば、如何でしょうか」
「なに？」

信長が意味深な光秀の発言に身を僅かに前のめりにさせている。それを光秀は見逃さなかった。興味を持っている証拠だ。

「美濃守護職。公方様は織田様に任せてもよい、と申しております」
「それはまことか」
「越前を發つ前、しかと承っております」
「書付はあるか？」
「今はごいませぬ。されど織田様が御望みであれば、すぐにでも公方様より頂いて参りましょう」

光秀は完全に信長が餌に食らいついたと思った。書付とは、いわゆる証文である。それを要求するということは、完全にこちらの掌に乗ったと考えていい。だが……

「よい。義輝公の御心は伝わった。それに儂は美濃守護になぞなるつもりはない」

「……は？」

光秀は理解できなかつた。守護職は美濃攻めにおいて道三の遺言状以上に確実な大義名分になるはずだつた。何せ道三がいくら信長に『美濃を譲る』と言ひ残したとはいへ、道三自身は美濃守護ではない。守護職は子の義龍が本来の守護・土岐氏を称することゝ継承している。つまり表向き正当な美濃国主は義龍の子である龍興の方なのだ。

それを覆すのが、今回の裁定であつた。元々守護職を交渉の材料にする気だつた光秀だが、こつちも拒否されるとは思つていなかった。

「いま義輝公より守護職を賜つたとしても、名のみであり実が伴わぬ。それでは当家の力を義輝公に認めては貰えまい。美濃平定は当家の力のみで行う。義輝公の力は借りぬ」

「さ…されど、それでは美濃平定に時間がかかりましょう。公方様の上洛に間に合ひませぬ」

「兵は出すと申した。それでよからう。下がつて義輝公へ伝えるがよい」

それを最後に光秀は有無を言わずに閉め出された。あつという間の出来事だつた。

渋々光秀は越前へ戻るしかなかつた。幸い、信長との面談は四半時（30分）もかかつていないため、その日の内に小牧山を発つことが出来た。

だが一方の信長はこれを機に忙しく動き始める。先ほどまで光秀が座っていた場所に、柴田権六勝家、林佐渡守秀貞、丹羽五郎左衛門尉長秀、木下藤吉郎秀吉が座っていた。

「先ほど將軍家より使者が参り、儂に上洛を求めてきた」

四人から『おお』と感嘆の聲が漏れる。それほどまで彼らにとって上洛は特別なことを意味していた。

「さらには儂を美濃守護に、と申してきたが、それは断った」

ここで信長の家臣たちは『何故か』と訊ねるような真似はしない。ただ黙って信長の意を受ける。それが織田家の常識だった。

「が、その話は使える。…五郎左」

「はっ」

「この話を聞けば、加治田衆は落ちるか？」

「確実に落ちまする」

中濃一帯に勢力を有する加治田衆は佐藤忠能を盟主とする土豪たちである。信長の命を受けて長秀が調略を仕掛けていた。

「権六、兵を整えよ」

「美濃攻めですな。腕がなるわい！」

勝家が握り拳を左掌に叩きつけ、闘志を湧き上がらせる。

「猿（秀吉）。その話を美濃中にはらまけ」

「はっ。同時に西美濃衆を斎藤家より切り離しまする」

「ふっ…ようわかっておる」

信長は顎髭を擦りながら、満足そうに頷いた。秀吉のこういう切れるところを信長は買っているのだ。

日本海に面するこの山城は関東管領の御城である。主たる上杉弾正少弼輝虎は去る三月に北条相模守氏康に攻められて窮地に陥っている関宿城主・梁田晴助を救援するために関東入りしていたが、輝虎が下総国へ入ると東関東の諸侯がこれに合流、梁田勢の士気も上がり奇襲を仕掛けてきた。流石の氏康も果敢徹せず、上杉本隊とは戦わずに兵を引いた。

救援に成功した輝虎は今月の初めに春日山に戻ってきた。そして、將軍・義輝の死を報されたのである。それから義輝の御霊を弔うため、毘沙門堂へ籠もっていた。とは言っても義輝は死んではいない。京での変事が関東へ届く頃には尾ひれが付いて死んだことになっていたのだ。

（逆賊共に上様が……やはりあの時、奴らを成敗しておくべきだった）

輝虎は振り返る。永禄二年（1559）に上洛した時のことを。

あの上洛の目的は、表向き上杉の家督相続と関東管領就任の認可を得ることだったが、実際は三好長慶を討って義輝を扶（たす）けることであつた。その為の、兵五千だつたのだ。

義輝の周辺を取り巻く情勢は厳しいものだったが、六角や畠山など反三好勢力の力も衰えておらず、輝虎は勝機を感じていた。しかし、義輝からすれば上杉勢五千が加わったところで勝ちを得るのは難しいと判断しており、三好討伐の許可を与えなかった。

（上様の命令を無視してでも実力行使に及ぶべきだつた……）

と、義輝の死を報された輝虎は悔やむしかなかった。そこへ小姓か

ら来客の報せが入る。

「御実城様」

「何用か。ここへは入るなと申し付けておったはずだが」

怒気を滲ませ、小姓を咎める。輝虎にとって毘沙門堂での祈りは神聖なものであり、何人たりとも邪魔は赦さなかった。家臣たちにもそう言いつけてある。故に咎めている。

「そ…それは重々承知にございますが…、上泉伊勢守様が目通りを願っておりますれば……」

「勢州が…か？」

珍しい、と輝虎は思った。

信綱は先代の長野家当主・業正が死去した後、主家を致仕していた。“郎党のみを連れ、諸国放浪の旅に出る”と春日山に挨拶に来た信綱本人から聞いている。それ以来、輝虎は信綱と会っていない。

しかし、すぐに会うかどうか迷った。実際、今は義輝の御霊を弔う祈りを捧げているところである。何よりも神聖で、大事な儀式だ。

しかし小姓は主君の傍近くに寄り、耳打ちした。

「伊勢守様はどうやら、上方から参られたようにございます」

「なに!？」

思わず声を上げてしまった輝虎が、小姓は構わず続ける。

「公方様のことについて、急ぎ御実城様に御伝えしたいことがある

とのこと」

「…すぐに会う」

と言つて毘沙門堂を出た。

半刻（1時間）後、四年振りの輝虎と信綱の対面となつた。現れた信綱は以前と変わらぬ姿であつた。

「久方振りじゃ。勢州よ」

「管領様も御健勝で何より……」

「上方より参つたと聞いたが？」

「はい。つい先日までおりました」

「上様が亡くなられたと聞いた。嘆かわしいことじゃ。何でも勢州は上様がことで儂に伝えたいことがあるとか」

「左様にございますが、その前に一つ訂正がございます」

「訂正？」

「公方様は御健在であらせられます」

「ま…まことか!？」

義輝の生存。それは衝撃だったが、まずは無事を喜んだ。何よりも輝虎にとって足利義輝という人物は、聡明かつ勇猛さを兼ね揃え、霸気に溢れた希有な存在。己の思い描く征夷大將軍そのものであり、乱れた秩序を取り戻す唯一の希望だつたからだ。

「今は窮地を脱し、越前へ身を寄せられております」

「越前…左衛門督殿のところか。ならば安心じゃ」

越前朝倉は上杉家にとって好意的な相手であるため、輝虎は心から安堵した。

「此度、その公方様に頼まれて管領様の許へ参つた次第」

「將軍家よりの使者……と申されるか」

「……そうなりますな」

ならば、として輝虎は立ち上がり、座を信綱に明け渡そうとする。

信綱が將軍家の使者であるのなら立場上で上司ということになるため、上座を明け渡し、下座より上様の御言葉を賜らなければならぬ。

しかし、信綱は首を横に振ってそれを拒否した。

「此度は公方様より命令を受けて参つたものではございませぬ。あくまでも依頼で参つたのです」

「はて？」

輝虎は臣下なのだから、命令すればいいだけのことである。そこら辺が輝虎には理解できずにいた。しかし、信綱は構わず続けた。

「公方様は逆賊の討伐を御望みです」

「で、あるう。三好・松永らの所行、赦されるものではない」

「そのため、管領様に上洛を求めておられます」

「……………」

輝虎は目を瞑った。

長慶を失ったとはいえど三好・松永らの力は侮れない。朝倉という新たな味方を手に入られたとはいえ、教興寺合戦の結果、上方に残る反三好勢力の力が弱まっており、義輝が自分の力を必要とするのは己でも理解できる。

「されど勢州よ。関東での争乱、日々激しくなっており。先日も甲斐の武田信玄が西上野へ迫っておりとの報知を受けた。近々また関東へ出陣するつもりじゃ。とても儂が離れられる状況ではない」

現在の関東は予断を許さない状況が続いていた。

関東制覇を狙う北条氏康はもちろんのこと、その盟友・武田信玄も輝虎が越後へ帰る度に兵を入れている。そして輝虎が関東へ赴くと撤退し、また兵を出すというイタチごっこが続いていた。

「分かっております。故に公方様は、これは命令ではなく『頼み』だと仰いました」

「上様が儂に頼む…と？」

「はい」

痛かった。主君に“頼み”と言わせている自分の胸がただただ痛かった。そして主君の窮地に駆けつけることの出来ない己の不甲斐なさを罵った。

「管領様。公方様は以前と同じく五千の兵でも構わない、と仰せです。それであっても上洛することは叶いませぬのか？」

信綱は率直な疑問をぶつけてみる。数年前までの関東の情勢は知っているが、ここ一、二年のことは諸国を放浪しており断片的にしか知らない。だが上杉家の最大動員数は二万を越えるはず。多くの守備兵を残していれば上洛は可能ではないかと考える。

「その程度であれば出来なくはないが……」

輝虎は迷っていた。

武蔵国の大半は北条家に奪われたままだが、上野、下野、下総、常陸、上総、安房と反北条の勢力が中心に活気づいている。急先鋒たる佐竹右京大夫義昭も常陸を統一する勢いだし、前年に国府台で北条に破れた里見刑部少輔義堯も未だ勢力を保っている。

自分が離れるという不安があるが、信綱の言うとおり五千程度なら上洛させる余裕がないわけではなかった。しかし、同時に五千を上洛させたところで、と思うところもある。充分に役に立つ自信はあるが、関東管領たるものとして、万余の兵を率いていきたい気持ちが強い。

「管領様。先の変事で生き長らえた後、公方様は死のうとなされたことがある」

「は？」

唐突に話を始める信綱に戸惑う輝虎。だが話の内容が内容だけに黙って聞く。

「妻子を、母御を殺されたのじゃ。無理もござらん」

「……………」

「管領様には妻子はおらずとも、母御はおりましよう。その無念、如何ばかりのものか御分かりになりましよう」

「……………」

「妻子とはあの世で会おうと約束までしたらしい。母御ともな。だが公方様は生きた。生きてしまった。儂らが御助けした所為だが、公方様はそれを恥じた」

「……………」

「恥じたからこそ、朽木谷の城で三好の軍勢が迫って来たとき、逃げ術があつたにも関わらずに公方様は城を枕に討ち死にする覚悟

であった。されど、また生きた」

「それは何故？」

「側近の細川兵部が説得した、明智十兵衛なる者もな。されど本音の部分は知りませぬ。公方様に直に会い、聞かれたらよい」

悲しい話だった。もし自分が同じ立場だったらどうしただろう。妻子を失う気持ちは分らないが、もし母が自分の家臣の手に掛かって死んだとしたら…、恐らく自分は怒り狂い、何人の制止も振り切りその者を八つ裂きにするだろう。それが叶わぬなら、助けられなかった己を恥じて死を選ぶ。そうするかもしれない。

(上様はどのような苦悩を抱えておられるのか……)

輝虎は胸に熱いものが広がっていくを感じた。そして己を恥た。関東管領として万余を率いて駆けつきたいと考えた己の見栄を。甘さを。

自分に言い聞かせる。『もう結論は出ているのではないか』と。

「上洛しよう」

輝虎の決心は固まった。

「まことで？」

「うむ。されど時期は当家の都合に合わせて貰いたい」

「それで、時節はいつ？」

「雪が降り始めれば、甲斐の武田も動けぬ。それまでに関東へ兵を送っておれば、北条輩も好き勝手は出来まい」

「となれば、十月の末辺りで？」

「一乗谷で御会い致しましょう、と上様に伝えてくれ」

「しかと、伝えましょう」

「…ああ、それと」

思い出したように輝虎が付け加える。

「一向一揆との和睦、上様に調停を依頼したい。どうやら裏から信玄めが手を引いているようなのだ。あれらに邪魔されたら堪らぬ」

「それならば、既に細川兵部が動いております。御安心を」

「それは重畳。もっとも、邪魔されたところで薙ぎ払っただけがな」

「管領様なら造作もありますまい」

「当たり前じゃ」

二人が微笑み合わすことにより、この会見は終わった。

こうして上杉輝虎の上洛が決まった。

織田信長と上杉輝虎……戦国の世に生まれ出し二人の将星が、將軍・義輝の馬前で轡くわを並べる時が、刻一刻と近づいていた。

上洛の時は近い……

【続く】

第六幕 将星二つ - 軍神と大うつけ - (後書き)

序章最終幕です。のでいつもよりちょっと長くなりました。

序章を書き終えるまで、かなりかかったように思います。これではこのお話を書き終えるのがいつになるのやら……

とは言っても次章の上洛編やその次、最初の方に書いたと思います。が、シナリオはほぼ出来上がっており問題は私の根気のみ。有り難いことに購読者も増えておりますし、感謝の一言です。頑張るしかありませんね。頑張ります。

また本編ですが、この辺りから歴史の針が史実より早く進み始めます。そして変化し始めます。引き続き寛大な御心を持って見て頂けると幸いです。

第一幕 傀儡將軍誕生 - 梟雄・松永久秀 -

六月五日。

越前国・一乗谷

義輝が京を追われて半月ばかりが過ぎ、初めて喜びを感じていた。尾張へ行っていた明智光秀が“織田信長参陣”の吉報と共に戻ってきたからだ。

「そうか、上総介（信長）が来てくれるか」

と喜色を浮かべる。光秀からの報告では信長は即座に自分の味方すると表明したという。信長の勇氣ある決断と忠節に感謝したいところだったが、何よりも信長が己の期待通りの人物であったことが嬉しかった。

「流石は上様にござる。後は上杉殿にございますな」

義輝と同じように喜びの表情を浮かべているのは、一色式部少輔藤長である。

義輝が越前へ移ってよりこれまで、僅かながら幕臣たちが駆けつけてきた。細川輝経、柳沢元政、上野清信、石谷頼辰、大館藤安、御牧景重らである。また覚慶のいる和田惟政の許にも何名か駆けつけているという報せが入っていた。

かといって彼らが今もここにいるわけではない。藤長以外は義輝の命を受けて各地へ飛んでいた。ただでさえ人材が枯渇している以上、彼らを遊ばせておく余裕はないのだ。

「しかし、左衛門督（朝倉義景）は悠長なものよ」

義輝が愚痴をこぼすのは隣から聞こえてくる慌ただしい音が原因だった。

「すぐに上洛する故に御所は無用と申したものを……」

安養寺の隣では義輝の新御所の建築が行われていた。しかし、義輝は事前にこれを断っている。だが義輝を保護する義景としては、立派な御所を建てなければ己の威信を世に示すことが出来ないの、どうしても御所は必要だった。故に理由を付けて建築を始めている。

「式部、若狭出兵の仕度は何処まで進んでおる？」

「はっ。今朝方に敦賀の景恒殿より報せが参り、まもなく仕度が整うので出迎えに参ります、とのことにごさいます」

「おう、まもなくか」

言葉に思わず力が入る。鬱憤が溜まっている義輝としては、暴れたくて仕方がないのだ。幸いにも朝倉家臣の中に中条流の富田勢源なる者があり、新当流である義輝の評判を聞きつけて訪ねてきた。これがまた盲目の剣客ということもあって大いに義輝の興味を湧かせた。今では毎日のように打ち合い、精気を養っている。

（若狭などあつという間に平らげてくれる。そしてその後は……京よー！）

若狭出兵に熱い闘志を燃えたぎらせる義輝であったが、一方で全く気が付いていなかった。油断と言っていいだろう。どうやって三好・松永を討ち滅ぼすかに思慮が集中しており、自分を逃がした奴らが

どのように動いてくるかをまったく予想していなかったのだ。

義輝の去った京の都では、驚くべき策謀が既に動いていた。

|||||

遡ること五月二十日。

上京・関白近衛前久邸

(何故この男がここにおる！)

それがこの邸宅の主・近衛前久が帰宅して最初の思ったことだった。

昨日、洛中では將軍・足利義輝が襲われるという事件が発生した。將軍の生死は不明、京の都は騒然としており、禁裏では緊急の朝議が招集された。前久もそれに参加して帰って来たばかりのところである。

「御待ち申しておりましたぞ、殿下」

居座る白髪の老体。まだ五十半ばらしいが、十は老けて見えるこの男を前久は知っていた。過去に義輝や三好長慶と会った際に何度か侍っていたのよく覚えている。それだけ印象深い男だった。しかし、実際にこうやって相対するのは初めてである。

「何故にこの者を通した！」

男を無視し、怒声を上げて家人を叱り上げる。家人は主の声の大きさに驚き、身を縮こまらせながら謝罪の言葉を口にするが、それで

も前久の怒りは収まらない。今にも腰刀を抜かんとする勢いである。この男、公家の頂点に立ちながらその振る舞いは武家そのものであり、言うなれば公家らしくないのだ。

「そう怒らぬで貰えませぬか。儂が勝手に上がり込んだだけのこと。その者は悪くありません」

その勝手に上がり込んだ男は悪びれもなく家人を弁護するが、前久はそんな男をキツと睨み付けた。

「義輝殿を襲った者が、何用じゃ！」

「これは異な事を仰る。公方様を襲ったは手前ではござらぬぞ」

「しらばつくれるな！義輝殿を襲った軍勢は蔦紋つたを掲げておつたらしいではないか」

「おおっ！流石は殿下、ようござんじで」

まるで他人事のように感心する男の態度に前久はさらに腹を立たせた。蔦紋は松永家の家紋であり、それを掲げる軍勢は松永家のものということになる。それが義輝の屋敷を襲ったのだから、犯人は目の前の男に他ならない。

「松永弾正！そちの仕業であらう！」

松永弾正少弼久秀。三好長慶の右筆から長慶の娘を娶って一門衆と同等の地位まで上り、今は若輩の主君を影で操る男の名である。その久秀が、変事の後に真っ先に訪ねたのが関白・近衛前久だった。

「これは大きな誤解があるようじゃ、殿下。公方様を襲ったのは手前ではございませぬぞ」

「偽りを申すな！」

「偽りではございませぬ。襲ったのは手前ではなく義久、我が子にございます」

「貴様の指図であろうがッ！」

人を小馬鹿にしたような態度で堂々と屁理屈をこねる久秀に前久は怒鳴り散らす。憤慨し、顔色を真っ赤に染め上げる。今にも頭の血管から血が吹き出そうなほどだ。

「公方様を殺めるなど、何と畏れ多い。天地神明に誓い、手前の指図ではございませぬぞ。その証に、我が手によって義久は捕縛いたしております」

「捕縛…じゃと!？」

「はい。今は三好下野守（政康）殿の屋敷にて蟄居させております」
この事自体は本当であった。主君の命（久秀の指示）により義久は蟄居処分を受けていた。しかし、理由が異なる。將軍弑逆を行った所為ではなく、実際はそれに失敗した為だ。だからといってそんな理屈が前久に通る訳もなく、前久は義久を打ち首にすべきと主張した。

「無論、そのつもりであります」

飄々と久秀も前久の意見に同調する。これが前久の怒りに拍車をかける。久秀は先ほどからこの態度を崩ず、のらりくらりと前久の言をかわしている。

「ならば、帰って即刻打ち首にせい！」

「そうしたいのは山々なれど、それを決めるのは手前ではございませぬ」

「ならば、そちの主である左京大夫（三好義重）に打ち首にさせよ」
「公方様を殺めたのですぞ。我が主とて裁定を下すのは憚られましよう」

「では誰が処分を下すというのじゃ！」

「誰が…とは、殿下の御言葉とは思えませぬな。次の將軍に決まっておりますしょう」

「つ…次の將軍…じゃと!？」

ここでようやく前久は久秀が自分を訪ねた理由を知ることになった。

（麿に新たな將軍を奏上せよというのか!？）

前久とて阿呆ではない。ここまで聞けば、久秀が何を考えているか分かる。久秀の許、つまりは三好方に十代將軍・義植の子孫がいることは百も承知だ。関白…：人民の最高位に座し、帝に奏上できる唯一の人間を久秀が訪ねた理由は明々白々。

そんな前久を無視するかの如く、久秀は一方的に話しを続ける。

「手前も義親公の命で公方様を御助けせんとしたのですが、不覚にも間に合わず。しかも公方様を襲ったのが我が子と聞き、胸が張り裂ける想いにございました。なれど御台様だけは何とか救出する事が叶い、これで何とか泉下の公方様へ顔向けが出来るというものにございます」

義輝の御台所。それは近衛植家の娘であり、前久の妹である。久秀がこのようなことを口にする意味はもはや語るまでもない。

（こやつ…麿を脅すつもりか）

前久の表情がみるみる変わっていく。怒りで赤かった顔が急に青醒める。

「いや、それにしても義親公。長年恨み積もった相手なれど、天下の秩序を保たんと將軍様を御守りせよとは、何と御心の深い御方か。この乱世、ああいう御方であればこそ鎮まろうというもの」

「義親を次の將軍とせよ、ということか」

「今日の殿下は勘違いが多いようじゃ。手前が次の將軍を定めるなど御門違いと申すもの。単に手前の印象を語っているだけございませぬ」

と言つて久秀は笑い飛ばすが、これが恫喝であることは分かりきっている。

「義親公が次の將軍となれば、洛中の治安も即座に回復いたしましよ。それでこそ御台様も安心して実家へ御戻り頂けるといふもの」

義親を次の將軍に据えろ、でなければ妹は返せない。それが久秀の要求だった。だが前久としても簡単に呑む訳にはいかない。目の前の男が將軍暗殺を指揮したことは明らか、そんな男の好き放題にやらせては今後、天下はどうなるか分かつたものではない。

「殿下、天下の為にまずは次の將軍を定めることが大事でございませぬ」

と言ひ残し、久秀は去つて行つた。

久秀の姿が見えなくなると、前久は情けなくもガクツと肩を落とす、膝から崩れ落ちた。いくら抵抗しようとも、自らが取れる道が一つしかないことを理解しているからだ。しかも久秀は他の公家衆へも

近づいており、翌日になつて宮中に戻つた前久を待つていたのは、
次の将軍は義親公しかおるまい』と何食わぬ顔で物言つ同僚たちの
姿だった。

(どいつもこいつも松永の走狗に成り果てよつて!!)

しかし、その数日後に光明を差す報せが前久の許へ飛び込んできた。
何と死んだと思われた義輝が越前へ逃れたというものだ。現将軍が
健在なら後任を定める必要はなくなる。これを理由に前久は義親の
征夷大将軍就任を断つた。

「関白殿下とあろうものが取るに足らぬ噂を真に受けるものではご
ざいませぬぞ。それに噂が真であつても将軍職は京にあつてこそ
将軍職。義輝公が戻られぬのなら次の将軍を定めるのみ。先例もご
ざいますぞ」

しかし、久秀は返答がすぐに届いた。しかも“明応の政変”を持ち
出してだ。

明応二年(1493)、畠山基家討伐の為に河内へ出陣した時の将
軍・足利義材(義植)の留守を狙い、管領・細川政元が足利義澄を
次代将軍に擁立して挙兵したことがあつた。結果、義澄方が義材を
追放して将軍職に就任した。

つまり、現在において洛中を支配している三好・松永は如何様にも
将軍を擁立することが出来るという訳である。しかも困窮の極みに
ある公家どもを金品で籠絡することを容易いことだった。

前久は抵抗する術を失つた。

そして六月九日のことである。三好・松永の軍勢に伴われて上洛してきた足利義親は従五位下に叙し、左馬頭に任官。名を義栄と改めた。翌十日に宿舎とした慈照寺にて勅使を受け、征夷大將軍職が宣下された。

足利幕府十四代將軍・足利義栄の誕生である。

栄えるとした自らの名が表しているのが松永久秀の栄華であろうことは、皮肉としか言いようがなかった。それを物語る出来事が、義栄が最初に出した命令であろう。將軍弑逆で蟄居している義久を赦免したのである。これに伴い、その主君であった三好義重は義継、義久は久通と改名し、これを義輝との離別の証とした。

一方で朝廷とて唯々いいたくたく諾々と従った訳ではなかった。義輝を討ち漏らしたことで三好・松永らが政治的に窮地に陥っていることを見抜いていた朝廷は、義栄に莫大な献金を要求したのだ。義栄側はこれを受け、五千貫を納めた。

この事を、義輝はまだ知らない。

【続く】

第一幕 傀儡將軍誕生 - 梶雄・松永久秀 - (後書き)

新章スタートです。

再び一幕となりますが、一応は十、二十となるよりは、章ごとごとから付けていききたいと思っています。

第二幕 若狭出兵 - 義輝、猛る -

六月九日。

義輝は若狭の争乱を鎮めるべく、一乗谷を出陣した。

若狭は守護の武田義統が前守護の信豊と対立しており、守護方に朝倉、信豊方に三好・松永が介入し、度々戦闘が行われていた。現在は若狭の中央部を守護方、東部と西部を信豊方が抑えている状況となっている。特に東部を信豊方に抑えられているため、朝倉勢は上洛中に背後を脅かされるという恐れがあった。今回はその憂いを断つための出兵である。故に完全に若狭を抑える必要はなく、最悪でも東部一帯を平定してしまえば良かったのだが、可能なら若狭の兵を上洛軍へ加えたいと考えている義輝は、あくまでも若狭一国の平定を目指すつもりでいる。

「これが国吉城か」

「はっ。城主は栗屋越中にございます」

「栗屋越中か…」

栗屋越中守勝久。若狭西部を支配する逸見昌経と双壁を成す若狭武田氏の重臣である。この国吉城に拠って朝倉勢を何度も撃退した猛者であり、信豊方随一の戦巧者と言っても過言ではないだろう。小国若狭の地侍如きと侮っていた朝倉方も勝久に敗れて方針の転換を余儀なくされている。昨年、芳春寺に付城を築いて攻城の拠点とし、時間をかけて弱らせていく戦法を採っている。義輝たちはこの地に本陣を敷いた。

「国吉城は堅城。ここはじっくりと構え、まずは青田刈りを行うが

宜しいかと」

以前より何度も国吉城を攻めている朝倉軍の総帥・義景が義輝へ進言する。

（何がじっくりじゃ。いち早く上洛せねばらなんというのに）

義景の鈍重さに義輝は呆れかえっていた。

そもそも義景は一度も国吉城を攻めたことはない。若狭攻めは前敦賀郡司である景恒の兄・景かげみつ？が行ってきたことだ。故に景恒配下の方は国吉城に詳しいが、義景は国吉城を見ることがすら初めてなのである。その義景の意見などまったく当てにはならない、と義輝は思っている。

しかし、一方で義景がいる利点もあった。

今回、義景が出陣したのは將軍である義輝が出陣するからであるが、当主自らの出陣ともあって本腰を入れたものとなっている。軍勢の数も一万五千を数えた。

（攻めても落ちぬ城など、攻めぬ方がよい）

上洛を前に中核となる朝倉勢に大きな損害を出すべきではない、と義輝は考えている。しかし、義景の出陣により軍勢の数が増えたことを活かせるのは何も城攻めにだけに限ったものではなく、特に將軍・義輝がいるという最大の利点もある。よって以前と同じ方法で攻めるのが愚策ではない。

「恐れながら…」

ここで明智光秀が発言の許可を求めてくる。もちろん義輝はこれを許す。

「国吉城を攻める必要はないかと存じます」

光秀の進言は義輝の意に沿ったものであり、大いに関心を寄せるものだった。

「何故じゃ？」

「栗屋越中が信豊様方に付いたのは、守護の治部少輔（武田義統）様が当家を頼ったからだと聞いております」

「つまりは他家に頼る主に反発したと？」

「御意」

「さりとて前守護の信豊も三好・松永を頼っておろう」

「信豊様の方は逸見昌経の入れ知恵によるものにごさいます」

義輝の隣で聞いている義景は光秀の言いたいことが掴みかねていた様だったが、義輝には何となく理解できた。光秀が言いたいのは、同じように見えて両者の立ち位置が異なる、ということだ。逸見昌経の場合は野心があつてのことだろうから攻める必要があるが、栗屋勝久の場合は条件次第で降伏開城も有り得る。故に勝久を攻める必要はないと光秀は言っている。

「ではどうすれば良い」

義輝が訊ねる。そこまで言う以上、光秀には国吉城を開城させるだけの策がなければ意味はない。

「まずは後瀬山にて治部少輔様と合流し、先に逸見を攻めるべきか

と存じます。また丹波衆へ決起を促す御内書を発して頂ければと存じます」

「丹波衆へ決起？」

「信豊様方を支援しているのは丹波の内藤宗勝（松永久秀の実弟）にございますれば、介入を許せば若狭平定は長引くかと」

光秀の考えはこうだ。まずは若狭争乱の根源である逸見氏を討伐、それに際して三好方より援兵を送らせないために丹波衆を決起させて足止めさせる。逸見を討ち、義輝の命にて守護の義統の正当性を認めたと上で朝倉勢が若狭から完全に撤退することを条件とすれば、勝久は城を開けるはずと読んでいる。しかし、この策の欠点は長年に亘って守護方を支援してきた朝倉家にまったく旨味がないことだ。現時点で義景が光秀の策を理解していれば、激怒しただろう。それが分かっているから、光秀は遠回しな言い方で義輝に進言しているのだ。聡明な義輝なら、理解するだろうと。

（されど、そなたはそれで良いのか？）

（大事は公方様の上洛にございます。今さら若狭などに構ってはおられませぬ）

目で会話する二人。物事の本質を見失わず、將軍家第一に動く光秀に義輝は大いに満足した。

「治部少輔と会うならば余が出向かねばなるまい。左衛門督、余の供をせい」

「は…ははっ」

未だよく状況を掴めていない義景が反射的に返事をする。

「景恒。ここはそちに任せる」

「はっ」

「されど田畑を刈り、城方を刺激するような真似は致すな。城を囲み、動きを封じるだけでよい」

いずれ開城させる城、青田刈りなどを行って刺激すれば勝久は武辺の者だけに意地になって降伏を拒否する可能性があった。故にここは軽率そうな義景でなく、景恒に任せることにした。景恒であれば、家中を見返すために義輝に信頼を得たいと考えているため、命令に背くような真似はしないだろう。

「しかと承りました」

思った通り景恒は特に異を唱えることなく、命令を受けた。また義輝は光秀を残していくことにした。万が一にでも景恒が城方を刺激しそうなことをやろうとした場合、身体を張って止めるだろう。

「明智、そちも残り景恒を扶けよ」

「承知しました」

光秀も義輝の意を汲み取り、命令に従う。

さっそく義輝は義景と共に丹後街道を東へ進んだ。途中、信豊方の城がいくつかあったがの一万を越える朝倉勢を阻めるような軍勢はなく、義輝は難なく後瀬山城に入ることが出来た。そこで守護・武田義統の出迎えを受ける。

「上様、よく来てくれました」

この小国の守護は今年で初老（四十才）を迎えるが、立て続けの謀叛からの心労か、顔はやつれて頬は痩けており一回りは老けて見え

た。自分と似た境遇に同情を禁じ得ないのは相手も同じようで、己の苦境に駆けつけてくれた見知らぬ義兄に義統はただただ感謝し、涙した。

「朝倉殿もわざわざの御出馬、感謝致す」

「治部殿も儂が来たからにはもう安心じゃ。大船に乗った気でいるがよい」

この後、若狭から朝倉の影響が完全に取り払われるとは露とも知らない義景は、目の前で這いつくばる義統の態度に己の自尊心を刺激され、尊大に振る舞った。

「治部、さつそくだが逸見昌経は何処におる？」

「ここより東、二里半（約10？）ほど行った高浜という地におります。新たに水軍を組織し、今年になって新城を築いております」

逸見昌経は四年前の戦いで守護の居館・後瀬山城を凌ぐとも言われた^{さいちやま}砕導山城を朝倉軍に落とされており、新たな本拠とすべく高浜に築城を開始した。

ここで義輝は義統の“今年になって”という言葉が引っかかった。

「治部。今年になって城を築き始めたのならば、まだ完成しておらぬのではないか？」

今年はまだ六月に入っただばかりである。半年も過ぎていない。

「はっ。未だ普請中かと」

「ならば一気呵成に攻める！」

義輝は即断し、武田軍を加えた全軍に出陣を命じた。すぐさま軍令は全軍へ届けられ、若狭では類を見ないほどの大軍が西へ進む。

しかし、ここで大事件が起こった。

「義統殿は若狭守護にあらず！若狭守護はこの信方ぞ！」

突如、義統の弟である彦五郎信方が新保山城で拳兵、街道を封鎖して国吉城の景恒との連絡を断ったのである。しかも信方は己が若狭守護であると主張した。

「莫迦なことを……余が守護と認めたは治部少輔ぞ」

信方の抱える兵は少ないので一手を差し向ければ済む話として初めは軽く考えていた義輝だったが、続報が入ると軽視できない事態へと発展した。

なんと京にて足利義栄が征夷大將軍に就任、武田信方を若狭守護に任じたというのである。しかもそれを義統の父・信豊も認め、後見として新保山城へ入ったという。

「このツ！痴れ者共があああ！！！！！」

いきなり前將軍さへいしゅんにさせられた義輝の怒りは凄まじかった。愛刀・鬼丸国綱を引き抜くと手当たり次第に周りの物を斬りつけた。憤怒の表情で怒りを撒き散らす義輝の姿は阿修羅か仁王かと思われるほどの異形ぶりだ、朝倉や武田の将たちは揃って義輝を畏怖した。

しばらく暴れた後、息を切らせた義輝が命令を下す。

「即刻、逸見を討てい！返す刀で信方も討つ！」
「はっ！！！」

恐怖心に駆られ、朝倉・武田軍は一直線になつて逸見昌経の高浜城を目指した。その行軍速度は速く、僅か一刻（2時間）で後瀬山から高浜までの距離を走破した。

「將軍が来た！？先に攻めるのは信方ではないのか！」

これに慌てたのが昌経である。

昌経は義輝を擁す朝倉勢を追い払うには三好・松永の援軍が必要と考えていた。これに自身の水軍と連携し、陸と海の二方面から反撃する。守護に仕立て上げた信方は謂わば援軍が到着するまでの時間稼ぎにするつもりだった。朝倉勢が若狭へ介入する大義名分は將軍・義輝と守護の義統がいればこそである。義栄が新たな將軍に就任し、信方を若狭守護としたならば大義名分は失われる。逆に守護職を得た信豊方に大義が生まれる。故に義輝が攻めるなら、その名分である信方をまず攻めると思っていた。

常の場合ならそうである。しかし、怒り猛つた義輝は常ではない。いつでも始末できる信方は捨て置き、三好・松永と通じる昌経を攻めた。

先ほどもではどうやって朝倉勢を攻めようか考えていた昌経は高浜城を焼いて遁走した。未完成の城では防ぎきれないと考えたのだ。

しかし、怒る義輝は逸見勢の逃走を許さなかった。追撃に追撃を重ね、逃げる兵を追うに追った。奴らが逃げ込む先は分かっている。丹波の内藤宗勝のところだ。逃げる先が分かれば、追いかける方も

楽である。

結局、昌経だけは何とか丹波へ逃れることに成功したが、その手勢は壊滅した。残った諸城も開城し、西若狭が完全に義統に降った。

昌経がたった一日で敗北したことは信方の新保山城へも波及した。これに信方の家臣たちが三好方へ肩入れしたことを後悔し始めたのだ。

「今からでも遅くはありません。兄君に降られませ」

と諫言する家臣たちだったが、今さら引けない信方はあくまでも抵抗の意思を示した。それは朝倉・武田の大軍が眼前に迫っても変わらなかった。それはそれで戦国の武将として信方の勇気を評せるところだが、家臣団は違った。

主を追ってでも、降伏するべきと考えたのだ。

翌日、信方と信豊の若狭追放を条件に新保山城は降伏。残るは栗屋勝久の国吉城だけとなった。

義輝が国吉城へ戻った頃には怒りも収まり、冷静に状況を把握できるまでになっていた。

（余が將軍でなくなった今、治部の正当性が失われた。栗屋越中が城を開くことは難しかろう）

と考えていたが、芳春寺に戻った義輝を待っていたのは予想もしない人物だった。なんと景恒の手引きで栗屋勝久本人が現れたのだ。

「御恥ずかしながら公方様へ弓を引いてしまいました。どうか御許し下さいませ」

目を丸くして驚く義輝。隣の義景も何が起こったのか分からないでいる。しかし、目の前にいるのは紛れもなく栗屋勝久である。

「実は……」

景恒が語る。

これより三日前。義輝が新久保城を囲んだという報せが景恒の許へ届けられた。これを聞いた光秀が単身国吉城へ入り、勝久を説得したのだという。勝久の拳兵はあくまでも若狭を想つてのことであり、昌経と違つて野心から端を発したものではない。義輝が若狭は武田氏のまま統治を任せるつもりであること、逆賊三好・松永らに擁立された義栄に何ら正当性のないことを光秀は諄々と説いた。これに武者である勝久は大いに納得し、義輝が戻ってくる前に開城した方がよいという光秀の勧めに応じて城を開けたのである。

（こやつは……、余の期待以上の働きをしてくれるわ）

改めて光秀の才能に惚れ込んだ義輝は、上洛の暁には光秀を直臣にすることを決断した。

こうして若狭は武田義統の下で纏まることとなり、栗屋勝久も今の地位のまま留め置かれることになった。義統は義輝の支援に感謝を述べ、上洛の時には手勢を率いて参陣することを誓った。

義輝は一乗谷へ戻ることになった。六月二十二日のことである。

また今回の若狭出兵は思わぬ戦果を上げることになった。義輝の呼びかけで決起した丹波衆が内藤宗勝と激しく交戦し、若狭の争乱が鎮まった後も互いに退かぬ状況が続いた。

そして八月二日。

丹波・黒井城を攻撃していた内藤宗勝が城方の反撃を受けて討ち死（宗勝と共にあった逸見昌経も討ち死）にしたのである。宗勝は丹波一国を任されていた程の人物であっただけに、三好方の損害は計り知れないものとなった。

これを機に丹波での攻防が逆転することになる。

【続く】

第二幕 若狭出兵 - 義輝、猛る - (後書き)

上洛編第二幕です。

正直、栗屋勝久の立ち位置には悩みました。野心で謀叛に奔った一面もあるので。しかし、後の義統の子・元明も救出していますし…、若狭武田家への忠節があり、ただ取り巻く状況が彼を謀叛へ奔らせたとしました。

逸見昌経は問答無用です。

第三幕 永禄八年 夏 - 決戦の時、迫る -

六月二十五日。

若狭の失陥を重く見た三好・松永らは前將軍・義輝へ対し、將軍・義栄の名で討伐令を出した。しかし、傀儡將軍である義栄の力は有名無実化しており、世間の反応は薄かった。

三好・松永が義輝の暗殺を目論見、將軍職を篡奪したことは既に天下に広く知れ渡っていた。故に表立って義栄に味方する大名は殆ど皆無であり、危機感を募らせた三好日向守長逸は幕府の役職を乱発し、手当たり次第に周辺勢力を味方へ引き込もうと画策した。

具体的には…

関東管領を北条家に、上野守護を武田家に任じることによって義輝の味方になるであろうと予測された上杉輝虎を牽制する策に出た。しかし、この軽率な行動は上野守護を武田に任じることへ北条家が不快感を示し、武田からは義輝を襲った理由を詰問されるといふ事態になり、使者は“義栄など何処の馬の骨か分からん御仁の命令など聞く理由がござらん”との返事と共に這々の体で帰って来た。ならばと西国の毛利に期待をかけて西国探題へ任じたが、ここでも使者は歓迎されず役職への就任も辞退された。

これを地方の有力大名には三好の影響力が弱い所為と考えた長逸は、三好家の強大さを知る近隣の諸大名へ守護職を与えることにした。しかし、義輝の生存と若狭の失陥を知る彼らは三好・松永の卑劣なやり方に揃って反発、唯一守護職を受けたのは美濃の斎藤龍興だけに終わった。

龍興は国中に“將軍・義輝が信長を美濃守護に任じる”という噂が広まっており、事の真偽を確かめるために越前へ使者を遣わしていた。これをまだ若狭へ出陣する前の義輝が否定しなかったため、龍興は藁を掴む気持ちで守護職就任を受けたのだ。

しかし、この龍興の軽挙な行動は斎藤家の崩壊を早める一因となった。

結局、味方らしい味方を得ることの出来なかった三好方は、配下の将へ守護職を与えることによって政権の盤石化を図るしかなかった。

管領 細川信良（晴元の嫡男）

管領代 三好義継

御相伴衆 三好長逸（山城守護も兼任）

御相伴衆 松永久秀（大和守護も兼任）

摂津守護 三好政康

丹波守護 内藤宗勝（同年八月に死去）

河内守護 三好康長

和泉守護 岩成友通

淡路守護 安宅信康

阿波守護 細川真之

讃岐守護 十河存保

長慶存命時までは主家であり守護家の細川一族を傀儡とし、名目上の守護としていた三好・松永であったが、ここにきてようやく完全に操れる將軍を手にしたことにより一族の守護化を図った。しかし、地場固めを怠った急場の策であったことは誰の目にも明らかであり、反三好勢力を勢いづかせる結果に終わる。

そこに、かつて三好長慶が誇った栄華は微塵も感じられなかった。

七月二十日。

越前一乗谷・義輝の新御所

数日前より安養寺から仮普請の終わった新御所へ居を移していた義輝の許へ、久しぶりに細川兵部大輔藤孝が戻ってきた。

「兵部！ようした！」

義輝は開口一番、藤孝の働きを労った。二日前、文によって加賀一向宗との和睦が成ったことを報されていたからだ。

「はつ。加賀一向宗は本山（石山本願寺）の意向もあり、上様が上洛中は矢止めに応じるとのことにございます」

「大義じゃ。これで上洛の道も開けたと申すものよ」

「若狭の争乱も鎮まったとか。おめでとう存じます」

「なに、大したことはなかったわ」

実際に若狭出兵は半月ほど終わるといふ、考えた以上に早期決着となった。最初にしては上出来であろう。しかし、その割には義輝の瞳には僅かな悲壮感が漂っている。その理由が將軍職の剥奪にあることは藤孝も察するところだ。

「越中門徒にも加賀衆の方から停戦を呼びかけて頂ける運びとなりました。直に上杉殿の上洛も叶いましょう」

「うむ」

相次ぐ吉報に義輝は満足そうに頷いた。

先月末、義輝が若狭から戻ってくると上杉輝虎が上洛に応じたという報せが届いた。義輝がこれに歓喜したのは言うまでもないが、何よりも喜ばせたのは輝虎の上洛が十月末辺りになるという報せだ。これは義輝が京を目指して出陣をする時期となり、それに合わせて朝倉や浅井など味方勢力が上洛準備に取りかかれるということの意味している。早ければ、今年中に帰洛が叶うかもしれない。帰洛さえ叶えば、將軍職への復帰も認められるだろうと思われた。

「兵部。輝虎が参るまで我らで軍略を練りに練らねばなるまいぞ」
「承知いたしております」

「そこでじゃ。朝倉とも図る必要があるが、一つ頼みがある」
「はい。何でございましょうか？」

「明智光秀じゃ。軍略を練るに当たってあれの智恵を借りたい」
「…なるほど、そういうことでしたか」

藤孝としても光秀の有能さは理解している。自分とて、光秀を頼りにするところがあるからこそ將軍救出の一手を任せただ。そこに義輝が目を付けたということは、将来的に家臣化させるつもりがあることも同時に見抜いた。

「光秀殿だけを呼べば左衛門督殿に憚られましょう。故に朝倉殿の名代として景紀殿も招きましょう。さすれば景恒殿が代理で参るか」と

「おう、それがよい」

義輝が朝倉家中へそれほど信を置いていないことは藤孝も理解して

総勢二万もの軍勢が美濃へ侵攻した。その行軍は神速の如し、稲葉山城を取り囲むの一日もかからなかった。

尾張大名・織田上総介信長の軍勢である。

既に中濃は織田家の支配下に入っており、西美濃衆への調略も進んでいた。ここで信長は一気に斎藤家の本拠・稲葉山城を落とす作戦に出た。先代・義龍の死後、衰退著しい斎藤家は本拠を家臣の竹中半兵衛が僅か十七名で乗っ取るという事件を起こした。これが昨年二月のことである。

その後、半兵衛は城を龍興に返したが、自らの求心力が落ちていることを周辺国へ露呈する結果となり、人心は離れていく一方だった。中濃一帯も織田家に寝返り、守護職を信長に取られまいと逆賊の手先と成り果てる主君を家臣たちは嘆き、見限り始めた。

「猿（木下秀吉）よ。西美濃三人衆は如何にしておる？」

「はっ。人質を出す、とのことにございます」

猿と呼ばれた小汚い男は、身の丈に合わない大きな甲冑をガツシャガツシャと揺らしながら答える。

「ならば貞勝に受け取りに行かせる。者どもには儂の許へ参るよう伝えよ」

「ははっ」

そそくさと退散する秀吉と入れ替わるように入ってきたのは柴田権六勝家だった。その勝家に信長は命じる。

「城下を焼け」

田信玄を食い止めるために出陣することになっているのだ。

「いざ出陣！」

号令と共に、軍勢が隊伍を組んで進んでいく。幾重にも掲げられた真っ白な軍旗が戦列を乱さずに行軍を続ける光景は、まさに上杉勢の精強ぶりを感じさせた。そのまま軍列は三国峠を越えて関東へ入る。

上杉勢は沼田を経て厩橋城へ入った。

厩橋城は輝虎の関東出兵の拠点となっている城で、一時は武田・北条の手に渡ったこともあったが、今は奪還し、城代に北条高広を据えて守らせている。ここより南の地は敵の勢力圏、その中に上杉方の諸将が点在しており、輝虎の救援を常に待ちわびている。

「高広、状況を報せよ」

「はっ。六月に倉賀野城が落ち、周りの諸城もことごとく武田の手に落ちてござる。信玄め石倉城を修復し、我らの箕輪城救援を阻む算段かと」

「うつつむ……」

状況が悪い。石倉城は利根川を挟んで対岸、目と鼻の先にあり、ここに武田の大軍が入っている。それは輝虎が厩橋入りする際にも確認できた。兵法の常道を行く信玄は、先に川を越えることが不利になると知っているために上杉勢を攻撃してくることはなかったが、悠長にしているでよい状況ではない。何よりも石倉城の役目は上杉勢を阻んでいる間に箕輪城を落とすことにあり、厩橋城攻略の為の拠点ではないのだ。

(だがこれでは……)

はつきり言つて劣勢である。早期決着を着けなくては義輝との約束には間に合わない。輝虎が上野にいられるのは遅くとも今月いっぱいまでだ。箕輪城を救うには眼前の石倉城を攻略し、途上の和田城を抜かなくてはならない。それを成す時間は輝虎にはないが、せめて石倉城くらいは落として行かねば上野の形勢は逆転不可能なまでに陥る。

「利根川を氾濫させればよいのです」

「なに？」

唐突に上泉伊勢守信綱が発言する。信綱は義輝の使者として輝虎の許を訪れた以降、一族へ預けた上泉城へ戻り、かつての主家・長野家や北条高広を扶けていた。

「天文の初め頃か、利根川が氾濫して石倉城が崩落したことがございました」

天文三年(1534)、信綱がまだ二十代半ばの頃である。大雨によつて水かさの増した利根川が氾濫を起こし、鉄砲水が石倉城を飲み込んだのだ。その時、僅かに残った三ノ丸の跡地に厩橋城が築かれることになった。

「石倉城は未だ俄造りにわかでござれば、大水に耐えられますまい」

「されどそれでは、この厩橋とて一巻の終わりぞ」

高広が反論する。石倉城が対岸にある以上、この厩橋も被害を被ることになる。強度の違いから、ただこちらの方が被害が少ないといっただけに過ぎない。また関東攻めの拠点を失うことにもなる。

「承知の上でございます。管領様がその必要はないと仰るのであれば、それで構いません」

自分の意見はただの提案に過ぎないと言い切る信綱。信綱とてこのような戦法で敵を討つことは本意ではない。やはり戦で堂々と決着をつけるのが筋道と考える性格だ。これには輝虎も同じであることを信綱は知ってる。しかし、同時に輝虎が上洛のために急いでいることも知っている。故に敢えてこのような方法を進言したのだ。

（厩橋を犠牲にすれば、武田に打撃を与えることが出来る。さすが上野は元より信玄が儂の上洛を阻むことも留守を狙うことも叶わなくなる）

輝虎は迫られる。己の矜持か、主君への忠義か。

（上様は妻子、母御を殺されてもなお生き恥を晒し、逆賊を討つ御覚悟をなされた……）

かつて春日山にて信綱に聞かされた話を思い起こす輝虎。義輝の無念に比べれば、今の自分の悩みなど大したことではないと気づく。

輝虎の眼がカツと見開いた。

半月後、石倉城は厩橋城と共に地上から姿を消した。氾濫した利根川の大水に飲まれたのだ。しかし、城ごと流された武田勢に対し、上杉勢は事前に厩橋を離れたことでほぼ被害は皆無だった。

数日後、輝虎は軍勢の大半を上野に残し、越後へ帰って行った。十月の初めのことである。

【続々】

第三幕 永禄八年 夏 - 決戦の時、迫る - (後書き)

まさかの二話連続投稿です。正直、疲れました。

また作中で信綱が軍師っぽいことになっていますが、そういう設定にしたのではなく、あくまで石倉城に限って“経験から物を言った”だけです。その後も軍師として活躍するわけじゃありません。

さて、次回から上洛編も盛り上がっていく予定です。若狭出兵では戦らしい戦を書けなかった(なかなか難しいのです、合戦を書くのは…)ですが、義輝と三好・松永の大合戦ではしっかりと書いていきたいと思えます。

第四幕 いざ出陣 - 諸大名集う -

十月二十五日。

越前国・一乗谷

ようやく待ちに待った瞬間が訪れた。

城下に長蛇の列で入ってくる軍勢。掲げられる“毘”そして“龍”の軍旗。関東管領・上杉弾正少弼輝虎の軍勢である。事前に領主より報せを受けている住民たちはこれを歓迎した。

一方で不可解なこともあった。七千と聞いていた上杉軍の数が明らかに多いのだ。どう数えても一万を越えている。

これには訳があった。

輝虎は義輝に報せた通り、七千で春日山を出陣した。ただ輝虎の上洛を悩ませるのは関東や甲斐の武田ばかりではなく、越中の争乱も長年に亘って輝虎を悩ませてきた種だった。ここ二、三年越中は比較的落ち着いてはいるものの留守を衝かれてもすれば堪ったものではない。そこで一計を案じることにした。

「上様の窮地である。臣下たる者、これを御扶けするべし。越中の者どもは我らが義挙へ加わられよ」

輝虎は越中の者たちを自軍に加えることにより、留守中に叛乱を起こさせないようにしたのだ。元より上杉方である越中の国人・椎名康胤はもちろんのこと、先年に輝虎へ降伏した越中守護代・神保長

職も輝虎の命令を拒否できず、矢継ぎ早に軍列に加わった。さらに輝虎は上杉家と友好関係を結んでいる能登守護・畠山修理大夫義綱へも合力を呼びかけ、畠山家は輝虎の申し出を快諾、義綱の父であり前守護の左衛門佐義統が上杉勢に加わることになった。但し、どの軍勢も上洛の仕度を整える時間が余りにもなかったために数は能登・越中勢を合わせても五千程度でしかなかった。

これにより上杉輝虎の上洛軍は一万二千にまで膨れ上がったのだが、予定より多いというのは義輝にとって喜ばしい報せだった。

「輝虎！よう参った！」

「上様！？かようなところまで……」

報せを受けた義輝は門前で輝虎を出迎えた。それほどまでに上洛を決意した輝虎の来訪が嬉しかったのだ。

突然の出来事に輝虎は下馬し、義輝の許へ駆け寄る。手を叩いて喜ぶ義輝の顔には刀創と思われる傷があった。かつて京で義輝に謁見した時にはなかった傷だ。洛中より脱出する際に付いたものだと推察され、これを見た輝虎は涙し、思わず視線を逸らして頭を下げた。

そこへ義輝が近寄り、そつと肩を抱き起こした。

「そなたが来てくれたならも安心じゃ」

「勿体なき御言葉にございます。必ずやこの輝虎が、上様を京へ御戻し致します」

「うむ。頼りにしておるぞ」

義輝と輝虎、六年振りの再会であった。

「左衛門佐もよう来てくれた」

「上杉殿に御誘いで今回の義拳を知った次第にて。前もって御報せ頂ければ、畠山家総出で参りましたものを…悔しゅうございます」
「よい。来てくれただけで余は嬉しいぞ」

恭しく礼をする義統であつたが、実のところ輝虎の言つ義拳にはあまり関心がない。ただ参加してそれなりの功を立てれば、將軍と関東管領を後盾に領内の大名権力を強化できると考えていたから、参陣したに過ぎない。その点、上方で幕政を牛耳るなどという野心は持ち合わせていないため、信用は出来た。

さていよいよ上洛、と思いきや問題が一つあつた。朝倉勢の仕度がまだ整っていないのである。義景は最後の最後まで上杉の上洛を疑つており、家臣らに上洛の仕度を命じていなかった。ようやく命令を出したのは上杉勢が加賀に入ったという報せを受けた後である。故に一乗谷に集まっているのは敦賀郡司・景恒と一乗谷に近い所領を持つ者たちだけで、筆頭家老たる景鏡ですら未だ姿を見せていないという有様である。

「左衛門督殿が申すには、まだ五日はかかるとのこと」

「悠長な。輝虎が来ることは前もって分かっていたことではないか」

ここに至つてもなお鈍重な義景に腹を立てる義輝。上杉勢が来たことで、すぐにでも出陣したいという逸りを抑えきれずにいる。

「どうか落ち着いて下さいませ。この輝虎、上様を京に御戻しするまで帰らぬ覚悟で参りました。故に時間はたとごとございます」

「おおっ、まことか！」

「はっ。故にまずは軍略を御聞かせ下さりませ」

「うむ。十兵衛、委細を説明せよ」

「畏まりました」

光秀が諸将の前に歩み出る。

「おおつ。そなたが明智十兵衛か」

「手前をご存じで？」

いざ軍略を説明しようとした矢先、光秀は急に輝虎から話しかけられたことで戸惑った。

「うむ。勢州（上泉信綱）から聞いておる。何でも上様救出に一役買ったとか」

「とんでもございませぬ。公方様救出は塚原様、伊勢守様のご活躍あればこそにございます。手前はささやかなお手伝いをしたまでのこと」

「されどそなたの手助けで上様の御命が救われた。この輝虎から礼を言わせてくれ」

「手前などに……勿体のう存じます」

輝虎は光秀の謙虚で驕らない様（おこ）に好意を持った。一方の光秀も輝虎をかなり堅い人物かと想像していたのだが、初対面の者の前でも飾らない人柄に“噂とは当てにならないものだ”として印象を変えた。

「では軍略を御説明申し上げます。まず我らの動きに呼应し、反三好の者どもが拳兵する手筈になっております」

義輝が各地へ送った御内書により反三好包囲網とも呼べるものが既に出上（い）上（あ）がっていた。具体的には河内の畠山、大和の筒井、播磨の三木、丹波で内藤宗勝を討ち取った萩野直正らが一斉に拳兵する手筈であり、中には既に活動を始めている者もいる。また三好よりの

独立を画策していた丹波の波多野秀治からも同心する約束を取り付けていた。

「我らは来月の朔日ついちちに一乗谷を出陣、北国街道を南下し、敦賀で武田治部少輔様と合流、刀根坂を経て余呉で浅井備前守様の軍勢と合流いたします」

朝倉勢が揃うのに五日かかる。つまり本来であれば三十日に出陣できるのだが、せつかなので縁起が良いとされる朔日に出陣することになった。また武田勢は二千、浅井勢は五千を出す予定になっている。これに朝倉勢が一万三千、上杉と北陸の軍勢が一万二千、合わせて三万二千を数える。

「ここで、軍を二つに分けます」

「二つに？三好勢は三万余と聞く。兵を分ける理由は？」

兵法では数が同数の場合、兵を分けるのは下策とされている。それを敢えて行うにはそれなりの理由があつて然るべきである。

「はつ。恐らく三好・松永らの軍勢は、公方様の上洛を勢多で阻むと思われませう」

古来より東から京へ攻め込む軍勢は、勢多川で防衛するのが常であった。源平合戦では平家が木曾義仲軍を阻み、義仲は源義経を同様に阻んだ。さらに承久の乱では後鳥羽上皇軍が鎌倉幕府軍を、南北朝の戦では足利直義が南朝軍とこの地で激戦を繰り広げた。しかし、いずれも防衛側が敗北している。それほどまでに京の防衛は難しいのだ。それを知っている輝虎にしては、回りくどく兵を分けずとも堂々と勢多を押し渡ればいいと考えている。また輝虎は兵を割いたところで自分がある軍勢が負けるとは微塵も思っていないが、兵法

に反する策を採る理由は知っておきたかった。

「一手を西近江路より進ませることで、敵の背後を脅かせます」

「その考えは分からぬでもない。されどそれでは、勢多で合戦に挑む際に敵勢に数で劣るのではないか？」

「ご安心を。既に我らは敵勢を上回っております」

光秀の説明では尾張の織田家、六角家より宿老の蒲生定秀、勢多城主・山岡景？が参陣することが付け加えられた。

「つまり一手を割いたところで、こちらが敵に劣ることはない？」

「はっ。左様にございます」

「ならば申すことはない…と言いたいが、一つだけ」

「何でございましょう？」

「六角殿は出陣されないのか？」

輝虎の疑問はもつともだった。こちらは三好・松永の謀略にあったとはいえ前將軍・義輝が出馬するのだ。朝倉と浅井、武田は揃って当主が出陣する。上杉に当たっても輝虎が出てきているし、畠山家は当主ではないが前当主が出陣している。織田家からも信長が出陣するという報せが届いている。なのに敵地にもつとも近い六角からは当主はおるか一門の出陣もないのでは話にならない。

「親子揃って病とか」

「何を莫迦な。上様に対する叛意を疑われても言い訳できぬぞ」

病が嘘であることは明らかである。それを咎めようとする輝虎を義輝が制した。六角承偵が出てこない原因が浅井との対立にあると知っているからである。遠国の領主である輝虎はその辺りの事情が疎く、気分を害するだけだった。

（あれはそういう男だ）

ただ義輝としては最初から承偵には期待しておらず、家臣らの参陣があつただけでも儲けものと割り切っている。

一方で光秀には拭いきれない不安があつた。織田家のことである。何度も問い合わせても“参陣する”との返答が来るだけで未だにどの程度の兵を送ってくれるか、合流地点が何処なのか、明確な回答がないのだ。業を煮やした光秀は自ら三度使者に出向いたが、二度は同じ返事ではぐらかされ、一度は鷹狩りに出ているとして会えず終いだつた。

それ故に西近江路に派遣できる兵は武田義統を大将に、朝倉景恒の敦賀勢、朽木元綱の計五千しか避けなかつた。

「次に陣立てですが先陣が六角勢、二陣に浅井勢、三陣が織田勢、四陣が畠山、越中勢、五陣に上杉勢、そして上様の本陣は朝倉勢が担当致します」

「お待ちあれ！」

「上杉様、何か？」

「我ら上様を扶けんと遠国から遙々参つた次第。それなのに五陣とは納得がいかぬ。替えて下され」

これに光秀は困つた。主な軍略は光秀と藤孝が練つたが、陣立てについては義輝の考えだったので変更は憚られた。義輝はもつとも信頼する上杉勢こそ本陣と考えていたのだが、自分を保護している手前、朝倉勢を本陣に据えなければならず、ならばもつとも自分に近い本陣前にと上杉勢を置いたのだ。

しかし、輝虎は義輝を守るためではなく、三好・松永らと戦うために来ている。

「我らは地理に不案内である故に先陣とは申さぬが、二陣を任せて頂きたい」

輝虎の本音としては先陣である。しかし兵法では“もっとも戦地に近い者が先陣を切る”ということになっており、六角勢の先陣は戦の常道は踏まえたものだ。よって二陣を希望した。

「よい、許す。余に越後勢の戦ぶり、見せてくれ」

「ははっ！」

これに義輝が応じた。

確かに輝虎を傍近くに置きたいというのはあるが、一方で精強と知られる越後勢の強さを見てみたいという気持ちもあった。

そして十一月朔日。

「いざ出陣！」

前將軍・足利義輝は朝倉・上杉連合軍と共に一乗谷を出陣、一路京の都に向かって北国街道を南下した。途中、敦賀で武田義統勢と合流し、刀根坂を越えて近江へ入る。義輝は半年前に僅かな供と落ち延びてきた道を三万近い軍勢と共に通ることは非常に感慨深いものがあった。

（もはやこの道を反すことはあるまいぞ！）

京の都が近づくとつれて、義輝は胸の内に熱く湧き立つものを感じていた。だがそれを抑える。高ぶる気持ちを爆発させるのは、ここではない。

軍勢は近江へ入り、余呉に到達。この地で義輝は浅井備前守長政の出迎えを受けた。

「浅井備前守にございます。これより先は、我々が御案内仕る」
「おおっ！そなたが備前守か」

長政の風貌は義輝の想像以上だった。

凡そ六尺（182？）にも及ぶ身長に見合った大きな体躯、若干二十歳の若者は幼さは残るものの精悍な顔立ちが戦国武将として十分なものだった。初陣で六角の大軍を破り、若年にて家督を継いだというのも頷ける。

（こやつは……左衛門督と違って頼りになる）

それが義輝の長政に対する印象だった。

京を追われ、將軍職を失ったものの若狭を平定、念願の上洛軍を発し、予期せぬ援軍、頼もしい勇将との出会いもあった。事は順調に運んでいる。しかし、全て義輝を喜ばせるものばかりではなかった。

浅井家からの報せが入る。

それは“近江の何処にも織田軍の姿がない”というものだった。

【続く】

第四幕 いざ出陣 - 諸大名集う - (後書き)

少し間が空きましたが、次話投稿です。

今後は投稿がまちまちなるかもしれませんが、今年中に上洛編終了までいければと思っています。

第五幕 邂逅 - 光秀、忠臣と出逢う -

十一月三日。

洛中・慈照寺

越前へ逃れている義輝が上洛へ向け、一乗谷を発ったという報せが早くも京に届いた。

「ははは…話が違つではないか!？」

一段高いところで脇息に抱きついて怯えている男の名は、足利義栄。第十四代足利幕府の將軍であり、全ての武家の頂点に立つ男である。

「それだけ、前將軍まへのかみが本気だということですよ」

「敵は三万を越えると聞いた」

「我らも三万、畿内にいる味方を含めれば我らが上にござる」

一方で冷静に状況を説明するのは今や京の主とも言える松永弾正少弼久秀である。

「將軍の味方は朝倉と浅井だけと申したではないか!上杉が来るなぞ聞いておらぬ!」

「だからどうしたと言つのです。田舎大名が一人増えたところで、何も変わりませぬ」

「関東管領ぞ!あの武田信玄すら勝てなかつた相手ぞ!」

「上杉はもはや関東管領にあらず。信玄めも所詮は田舎大名にござる」

上杉輝虎や武田信玄が田舎大名かはともかく、義栄政権下では上杉

家に対して関東管領の再任は行っていないのは事実だった。つまり朝廷が認めた正式なる武家政権の足利幕府では、関東管領は不在状態となる。

「上杉は先の関東攻めで十万を超える大軍を動員したと聞いたぞ」「噂に過ぎませぬ。その証に、今回は一万にも満たぬと聞いてござる」

久秀がどのように言い繕われようが、義栄は恐怖心を拭い去ることは出来ずにいる。この戦に出たことのない男は、ただただ“義輝迫る”の報に怯える事しか出来なかった。

「どうやら上様は我らの力を侮っておる様じゃ。上方にて二十五年、向かうところ敵なしの三好家に敵う者などおりませぬ」

「敵なしじゃと!? 何度か負けておるではないか! 知っておるぞ!」「小競り合い程度の戦にござろう。最終的に勝ちを収めたのは我ら三好なり」

久秀が義栄を説得しているのも近江へ出陣させるためだ。迫る軍勢の総大将は前將軍・足利義輝。ならばこちらも將軍を総大将に担がなければ、三好方の將はともかく兵の士気は上がらない。

(これだから阿呆は困る。これが義輝ならば即出陣に応じたものを……)

久秀は自ら追放した相手ながら、將軍としての器量を持つ義輝を羨んでいる自分を馬鹿馬鹿しく思った。

「もう宜しい! 前將軍めは我らのみで迎え討つ。それで宜しいな!」「わ…分かれればいいのじゃ。分かれば……。うむ、吉報を期待して

中でも政庁となる信長の居館は早々に金華山の山麓部分に築かれており、冠木門に虎口、土塁と最低限の防備も整えられている。

「おう、明智か。如何した？」

現れた信長は未だに軍装を纏っておらず、平服のままである。光秀が来訪した理由を掴みかねているようだった。

「如何したではございませぬ！公方様の上洛に兵を出して頂けるとのお約束であつたはず。日取りは前もつて伝えたはずです！」

「……ふう。そなた、眼は付いておらぬのか？」

「では城下の軍勢は、公方様への援軍でございませぬか！」

「で、ある」

その瞬間、驚喜したと言つていいだろう。光秀自身、このような気持ちになつたのは生まれて初めてだった。少なくとも覚えはない。何せ城下で見た二万を越える軍勢が加われば、義輝の軍勢は五万を越えることになる。三好を圧倒できる。

「さ……されど兵数は約束できないと織田様は……」

「言つたが、美濃攻めの最中だとも言つたぞ」

「た……確かに……」

光秀が信長に援軍を要請した際、兵一万を要求したのは出し惜しみをさせないためだ。戦国武将の兵を出すと言つても少勢で済ませることが多く、それを懸念してのことだった。しかし、その常識は目の前の男に覆された。それも良い意味で。

光秀の脳裏には一つの言葉が自然と浮かんだ。

“勝った”……と。

「ならば今すぐ御出陣を御願ひ申し上げます。公方様は既に近江に入られており、三好・松永との決戦は間もなくとなりましょう」

「悪いが、それは出来ぬ」

「何故にございましょうか！」

柄にもなく素つ頓狂な声を上げる光秀。既に岐阜城下に二万の軍勢が整い、義輝の近江に入った。何を躊躇する必要があるというのか。その理由が光秀には分からない。

「まだ兵が揃っておらぬ」

「これ以上増えるというのですか!？」

光秀はさらに驚いた。

「都合三万五千。もっとも間もなく駆けつけてこられる松平殿の軍勢と合わせた数だがな」

途方もない数だった。光秀が義輝と共に東奔西走して掻き集めた軍勢とほぼ同数の軍勢を信長は動員しようというのだ。確かに濃尾凡そ百万石を領する織田家にはその力はあるだろう。しかし、信長は美濃を攻め取ったばかりだ。

それには理由がある。

元々信長が治めていた尾張は有数の商業圏であり、熱田や津島はその中心である。故に上洛に必要なものは概ねそこで揃う。一方で信長は美濃を殆ど調略で落としたことにより領地替えが龍興の直轄地もしくは最後の最後まで味方した一部の側近の所領しか行われてお

らず、未だ美濃の領主たちは斎藤家が国主だった頃とそう変わりない。故に信長が命令を下すだけで十分な兵数を動員することが出来る。

また信長は後顧の憂いを断つために武田信玄の四男・勝頼へ養女を嫁がせることにした。現時点では既に結納を済ませており、輿入れを待つだけとなっている。さらに信長は妹の於市を浅井長政に嫁がせた。隣国、飛騨と伊勢には信長を相手に出来るほどの勢力はない。これにより全軍を躊躇なく動員することが可能になったのだ。

さらに松平が参陣することも嬉しい報せだ。

松平氏は三河の有力者でかつては三河一国を支配していた時期もある。少し前までは東海三力国を治める今川家の麾下に甘んじていたが、信長が桶狭間で今川義元を討つと独立、一向一揆との抗争を経て今では三河一国をほぼ平定している。

「な…ならば一部の軍勢だけでも送っては頂けないでしょうか？」

光秀は懇願する。織田の同盟者である松平が参陣する以上、信長は岐阜を動けないだろう。しかし、いま城下にある二万の軍勢の一部を近江へ送ってくれるだけでも勝敗は大きくこちらへ傾くのだ。

「…ふむ。ならば西美濃衆五千を預ける」

「有り難く存じま…預ける？」

「援軍が必要なのであろう。そなたが率いて行け」

「お…お待ち下され！手前は他家に仕えし…」

「帰蝶の縁者で美濃の出、であらう。ならば我が身内も同じ。美濃衆を率いても何ら問題はなからう」

「し…しかし…」

「この状況で使者など務めておるのじゃ。どうせ自ら率いる軍勢も持たぬのだろう？義輝公の御為に軍勢を率い、働きたいとは思わぬのか？」

痛いところを衝かれた、と思った。

「儂の家来は忙しくてのう。そちが断るなら、上様への援軍は全軍が揃うまで待つことになるが…」

意地悪く信長が光秀に話す。信長としても朝倉の客分でありながら領分を越えて義輝に尽くす光秀に興味を持っている。その器量を試そうとしていた。

また光秀と自ら兵を率いて義輝に奉公したいという気持ちは強い。しかし、悲しいかな今の自分はその立場になかった。だからこそ出来ることをやろうとこうして信長の許へ使者として出向いているのだが、信長の破天荒な申し出を受ければ、自らの望みが叶う。そしてそれは何よりも義輝の助けになる。

「…お引き受け致します」

こうして光秀は思わぬ軍勢を率いることになった。しかし、通常なら他家から送り込まれる人間は軍監や目付などになる。一隊ならともかく五千もの兵を他家の人間が率いるというのは問題のある行為だ。それが早くも露見することになる。

「何故に光綱（光秀の父）の倅如きの指図を受けねばならぬ。信長様は我らの忠誠をお疑いか」

美濃衆は信長に従ったばかりで心服しているとは言い難かった。ま

た彼らは明智家を既に没落した家と認識しており、けして自分たちの上に立つ者ではないと思っていた。光秀に預けられた西美濃衆の面々は揃って挨拶に顔を出すようなことはせず、こちらから訊ねても会って貰えなかった。

（これでは軍勢を預けられても何も出来ぬではないか！）

と、心の中でそう叫ぶ光秀だった。

「申し訳ござらぬ。主たちは信長様の御命令には従うが、明智様の下知には従えぬと申しております」

それでも信長の命令である以上は光秀との連絡は必要であり、稲葉良通の家臣・斎藤内蔵助利三が付けられることになった。利三は幕臣の蜷川氏と縁が深く、義輝との連絡役を務める光秀を相手にするには適任ということで抜擢された。

「こちらこそ済まぬことをしたと思っております。私は織田様に援軍を請いに参っただけのこと、戦の采配まで指図したりはせぬ故に御安心下され」

「されど、信長様より大将は明智殿と伺っております」

「儂とて立身出世の欲がないわけではござらぬ。されど織田様より預かりし公方様への援兵。何よりも大事は公方様を京へ御戻しし、天下の秩序を回復することにごさる。私が原因でせつかくの軍勢が使い物にならぬでは意味がござるまい」

最初は自らの手で采配を振るえるかと意気込んだ光秀だったが、西美濃衆の面々に臍へそを曲げられてしまっは意味が無いので名目上の大将として道案内役に徹することにした。

(まったく…指図をせぬとは清廉な方ではないか。殿は何故に明智殿を嫌われるか)

一方で利三は腹立しく思った。

所詮、良通の考えは大局を見、天下を考えている光秀からすればどうでもいいことに過ぎない。地方豪族の意地の張り合いなど“公方様の御為”の言葉で一蹴される程度のことなのだ。幕臣との繋がりが深い利三は、光秀の考え方に共感を覚えた。

「明智殿。主がどう申しましようとも我が手勢だけは明智殿の下知に従いましょう。何なりと御命じ下され」

「いや、それでは斎藤殿が良通殿に叱られましよう」

「御心配には及びませぬ。信長様よりの御命令が、明智殿の下知に従うことなのです。遠慮は無用と申すものにござる」

「有り難い。必ずや働きを無駄に致すことはしませぬ」

利三の申し出により、光秀は三百だが意のままに動かせる軍勢を手にする事が出来た。この僅かな兵が目の前に迫っている戦で思わぬ活躍をすることになるとは、光秀も利三も知る由もなかった。

そして、この二人の出会いが長い付き合いの始まりになることも……

【続く】

第五幕 邂逅 - 光秀、忠臣と出逢う - (後書き)

次話投稿です。

やっぱり光秀と言えば、斎藤利三ですよ。まだ彼は光秀の家臣ではありませんが、後々は……

さて次回、ようやく両軍が出揃います。合戦も間近です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4359y/>

剣聖將軍記

2011年12月13日02時45分発行